

いとたけやくひきよくつく。拍子ひょうしを揃へて夜遊やいうの舞樂ぶがくはありがたや。(樂)
 糸竹いとたけの役やく秘曲ひきよくを盡し。拍子ひょうしを揃へて夜遊やいうの舞樂ぶがくはありがたや。(樂)
 シテ「面おも白しろや此この舞樂ぶがく。地おもしろ面白しろや此この舞樂ぶがくの。鼓つづみはおのづから。磯いそうつ波なみの聲こゑ。松風まつかぜは琴きんを調しらめ心しん耳みみ
 を澄すますすたりからに。天あまつ御空みそらの雲居くもわかや耀わたき渡わたり。湖水こすいの面おも鳴動めいどうするは。天燈てんとう龍燈りゆうとうの來現らいげんかや。
 天地てんちの兩燈りゆうとう現あられて。天地てんちの兩燈りゆうとう現あられて。神前しんぜんに供ごふる御燈ごとうの光ひかり。山河さんか草木さうもく赫くき渡わたり。日夜にちや
 の勝しょう劣りつ見みえざりけり。(舞)

シテ「誰たれかくて夜よも早明はやあけ方がたの。池いけかくて夜よもはや明あけ方がたになれば。おのおの明神みやうじんに御暇おんいとま申まうし。
 歸かへれば明神みやうじんも御聲みこゑを上げて。善哉ぜんざい善哉ぜんざいと。感かんじ給たまへば。天女てんにょは天路あまぢに又また立ち歸かへれば。龍神りゆうじんは湖
 水すいの上うへに翔かけつて。波なみを返かへし雲くもを穿うがちて。天地てんちに別わかれて飛とび去さり行ゆけば。明あけ行ゆく空そらも白髭しらひげの。明あけ
 行ゆく空そらも白髭しらひげの。神風かみかぜ治さまる御代みよとぞなりにける。

九十二 盛久

ワキツレ 盛久 太刀取 ワキ 土屋三郎

シテ(盛久)「如何いかに土屋殿つちやどりに申まうすべき事ことの候こと。ワキ(土屋三郎)「何事なにことにて候ことぞ。シテ「唯ただ今いま關東くわんとに下くだりな

ば。これが限かぎりなるべし。清水きよみづの方ほうへ輿こしを立て、給たまひ「給たまひ」給たまひ候ことへ。ワキ「それこそ易やすき御事おんこと。如い
 かに面面めんめん。東山とうざんの方ほうへ輿こしを立てられ候ことへ。

シテ「南無なむや大慈大悲だいじだいひの觀世音くわんぜんおん。さしも草くささしも畏かしこみ誓ちかひの末すえ。一いつ稱しょう一念いっぺん猶なほ頼たのみあり。まして
 や多年たねんちゆ知遇ちぐよの御結縁ごけつえん空からしからんや。あら御名殘おんなごりをしや。いつか又また。清水きよみづ寺でらの花盛はなざかり。地かへ歸かへる春はる
 なき名殘なごりかな。シテ「音ねに立たてぬも音羽山おとはやま。地たき瀧たきつ心こころを人ひと知らじ。シテ「見渡みわたせば柳櫻やなぎざくらを、こさま
 せて。錦にしきと見ゆる故郷こきやうの空そら。地また又またいつかばと思出おもひでの。限かぎりなるべき東路あづまぢに。思おもひ立たつこそ名殘なごり
 なれ。シテ「われなまじひに弓馬きうばの家いへに生うまれ。世上せじやうに隠かくれなき身みとて。地おも思おもはざる外ほかの旅行りょこうの道みち。
 關せきの東ひがしに赴おもむけば。跡あと白河しらかはを行ゆく波なみの。いつ歸かへるべき旅たびならん。こゝは誰たれをか松阪まつさかや。四しの宮河原みやがはら
 四よつづの辻つち。これやこの。行ゆくも歸かへるも別わかれては。行ゆくも歸かへるも別わかれては。知しるも知らぬも逢坂あふさかの關せき
 守もりも。今いまのわれをばよも止とめじ。勢田せいたの長橋ながはしうち渡わたり。立ち寄よる影かげは鏡山かがみやま。さのみ年經としへぬ身みなれ
 ども。衰おとろへば老曾おいその森もりを過すぐるや美濃尾張みのをはり。熱田あつたの浦うらの夕ゆふの夕ゆふの。道みちをば波なみに隠かくされて。まはれば
 野のべに鳴海湯なるみ。又また八橋やっはや高師山たかしやま。又また八橋やっはや高師山たかしやま。沙見阪橋本さみさかの。濱名はまなの橋はしをうち渡わたり。シテ「旅たび

衣。かくきて見んと思ひきや。命なりけり小夜の中山はこれかとよ。地「變る淵瀬の大井河。過ぎ行く波も宇津の山。シテ」越えても關に清見瀉。地「三保の入海田子の浦。うち出でて見れば眞白なる。雪の富士の嶺箱根山。猶明け行くや星月夜。はや鎌倉に著きにけり。はや鎌倉に著きにけり。シテ」夢中に道あつて塵埃を隔つ。げにやそことも知らざりし。山を越え水を渡つて。此關東に著きぬ。百年の榮華は塵中の夢。一寸の光陰は沙裏の金。げにや故郷は雲居のよそ。千代もと契りし友人も。變る世なれやわれ一人。鎌倉山の雲霞。げにかゝる身の習かや。詞かくてながらへ諸人に一面をさらさんより。臨あつれば疾う斬らればやと思ひ候。ワキ「詞」あら痛はしや盛久の獨言を仰せ候。いかに申し候。土屋が参りて候。シテ「土屋殿と候や此方へ御入り候へ。ワキ「御下向の由を披露申して候へば。急ぎ誅し申せとの御事にて候。シテ」唯今も獨言に申し候。かくて長らへ諸人に一面をさらさんより。あつれば疾う斬らればやとの念願。さては早適ひて候よ。さて最期は唯今にて候か。ワキ「いや御最期は此曉か。然らずば明夜かと仰せいだされて候。シテ」さては暫くの時刻にて候よ。扱も此程土屋殿の御芳志。申すもなかなかおろかなり。又

なからん跡一遍の念佛をも御廻向に預からば。蓋二世までの御芳志たるべし。詞われ此年月清水の觀世音を信じ。毎日かの御經を怠ることなし。さりながら今日は未だ讀誦申さず候ほどに。御暇を給はり候へ。かの御經を讀誦申したく候。ワキ「それこそありがたう候へ。御心靜に御讀誦候へ。(此一句今「土屋」もこれにて聽聞申さうするにて候。シテ「ありがたや大慈大悲は薩埵の悲願。定業亦能轉は菩薩の直道とかや。願はくは無縁(一字或は)の慈悲を垂れ。われを引導し給へ。今生の利益若し缺けば。後生善所をも誰か頼まん。二世の願望若し空しくば。大聖の誓約豈虚妄にあらずや。或遭王難苦臨刑欲壽終。念彼觀音力刀尋段段壞。ワキ「ありがたや此御經を聽聞申せば。御命も頼もしうこそ候へ。シテ」げによく御聽聞候ものかな。此文といつば。譬へ人王難の災に遇ふといふとも。その劍段段に折れ。ワキ「又衆怨悉退散といふ文は。射る矢も其身に立つまじければ。シテ」げに頼もしやさりながら。全く命のために此文を誦するにあらず。シテ「ワキ」種種諸惡趣地獄鬼畜生。生老病死苦以漸悉令滅。地「此文の如くば。もろもろの惡趣をも三惡道は遁るべしや。ありがたしと夕露の命は惜まず唯後

生こそは悲しけれ。昔在靈山の。御名は法華一佛。今西方の主。又娑婆示現し給ひて。われらがための觀世音。三世の利益同じくは。かく刑戮に近き身の。誓にいかで洩るべきや。盛久が終の道も闇からじ頼もしや。シテ、御「あらふしぎや。少し睡眠の内に。あらたなる靈夢を蒙りて候はいかに。あらありがたや。候。ワキ、既に入聲の鳥鳴いて。御最期の時節唯今なり。はや御出で候へとよ。シテ、御「待ち設けたることなれば。左には金泥の御經。右には思の珠の緒の。壽命も今を限なれば。これぞ此世を門出の場に。足弱弱と立ち出づる。ワキ、武士前後を圍みつゝ。これぞ別の鳥の聲。シテ、鐘も聞うる東雲に。ワキ、牢より籠の輿に乗せ。シテ、由比の汀に。ワキ「急ぎけり。地「夢路を出づる曙や。夢路を出づる曙や。後の世の。門出なるらん。ワキ、既「さて由比の汀に著きしかば。座敷を定め敷皮敷かせ。はやはや直らせ給ふべし。シテ、御「盛久やがて座に直り。清水の方は其方ぞと。西に向ひて觀音の。御名を唱へて待ちければ。ワキ、御「太刀取後。にまはりつつ。稱念の聲の下よりも。太刀振り上げれば。はいかに。御經の光眼に塞がり。取り落したる太刀を見れば。二つに折れて段段となる。御「はそもいかなる事やら

ん。シテ、御「盛久も思ひの外なれば。たゞ茫然とあきれ居たり。ワキ、御「いやいや何をか疑ふべき。此程讀誦の御經の文。シテ、臨刑欲壽終。ワキ、念彼觀音力。シテ、刀尋。ワキ、段段壞の。地「經文あらたに疊なき。劍段段に折れにけり。末世にてはなかりけり。あらありがたの御經や。やがて此由聞こし召し。急ぎ御前に參れとの御使度度に重なれば。召に隨ひ盛久は。鎌倉殿に參りけり。鎌倉殿に參りけり。ワキ、御「いかに盛久(今は此句に「御前にて)君この曉ふしぎなる御靈夢の御告あり。盛久も若し夢や見けるとの御事にて候。シテ、何をか隠し申すべき。今夜ふしぎの靈夢を蒙りて候。ワキ「さらばその靈夢のやうな。御前にて眞直に申し上げられ候へ。シテ、畏つて候。諸それ不就正覺の御誓。今以つて始ならず。地「過去久遠の大悲の光いづく不到の所ならん。シテ、然るにわれ此光陰を頼み。地「日夜朝暮に怠らず。かの御經を修讀せしに。とりわき此時節。刑戮に近き身と思つて。片時怠る事もなく。シテ、初夜より後夜の一點まで。地「蕭然として座したりしに。六窓未だ明けざるに。默然たる一天虛明なる内に思はずも。八句にたげ給ひぬと見えさせ給ふ老僧の。香染

の袈裟を懸け水晶の數珠を爪繰り。鳩の杖にすがりつゝ。妙聞たゞしき御聲にて。われは洛陽
 東山の。清水のあたりより汝がために來りたり。本より大慈大悲の。誓願などか空しからん。
 唯一音なりとても。われを念ずる時節の。王難の災は逝るべし。シテ況や汝年月。地多年の
 誠を抽んで。發心人に超えたり。心安く思ふべし。われ汝が命に代るべしと宣ひて。夢は
 即ち覺めにけり。盛久貴く思ひて歡喜の心限なし。地頼朝これを聞しめし。此曉の御夢
 想も。同じ告ぞとあらたなる。御信惑は限なし。シテ其時盛久は。夢の覺めたる心ちして。感
 涙をとめかれ御前を罷り立ちければ。地いかに盛久暫しとて。御簾を上げて召さるれば。シテせ
 ん方もなき盛久が。地命は千秋萬歳の春を祝ふぞと。御盃を下さるれば。シテ種は千代ぞと
 菊の酒。地花を受けたる秋かな。
 ワキ、圓いかに盛久。盛久は平家譜代の侍武略の達者。殊には亂舞堪能のよし聞し召し及べたり。
 一年小松殿。北山にて茸狩の遊路の御酒宴に於いて。主馬の盛久一曲一奏の事。關東まで
 も隠れなし。殊更これは喜のなりなれば。唯一さしとの御所望なり。急いで仕り候へ。シテあ

りがたしありがたし。得難きは時。さり難きは貴命なり。盛久かゝる時節に逢ふ事。世以つて例あ
 るべからず。治まり靡く時なれや。一天四海の内のみか。人の國まで日本の木の。唐土が原もこ
 の所。(勇)酒宴半の春の興。酒宴半の春の興。曇らぬ日影長閑にて。君を祝ふ千秋の。
 鶴が岡の松の葉の。散り失せずして正木の葛。シテ長居は恐あり。地長居は恐ありと罷り申
 し仕り。退出しける盛久が。心の中ぞゆゆしき。心の中ぞゆゆしき。

九十三 佛原

ワキ (御前(前は女))

ワキ(旅僧)「よそは梢の秋深き。よそは梢の秋深き。雪の白山尋ねん。これば都方より出でた
 る僧にて候。われ未だ白山禪定せず候ほどに。此秋思ひ立ち白山禪定と志して候。進行、遙
 遙と。越の白山知らざりし。越の白山知らざりし。そなたの雲も天照す。神の柞のみみぢ葉の。
 誓の色も彌高き。峯峯早く廻り來て參詣するぞありがたき。參詣するぞありがたき。急ぎ候ほ
 どに。こればはや加賀の國佛の原とやらん申し候。日の暮れて候ほどに。これなる草堂に立ち寄

り。一夜を明さばやと思ひ候。

シテ(女)、「御」のうのうあれなる御僧。何とて其草堂には御泊り候ぞ。ワキ、「ふしぎやな道もなく里もなき方より。女性一人来りつゝ。われに言葉をかけ給ふは。いかなる人にてましますぞ。シテ、「これ此佛の原に住む女にて。時こそあれ今宵しも。此草堂に御泊りこそ。ありがたき機縁にてまします。けふは思ふ日に當れり。御經を讀み佛事をなしてたび給へ。涼しき道に引導し給へ。ワキ、「三従の此身なれば。迷の雲も晴れ難き。心の水の濁を澄まして。涼しき道に引導し給へ。ワキ、「御經を讀み佛事をなせと承る。それこそ出家の望なれ。さてきて甲ひ申すべき亡者は誰にてましますぞ。シテ、「(今觀望二流にては此間に「さらは其名)いにしへ佛御前と申しし白拍子は。此國より出でし人なり。都に上り舞女の譽世を勝れ給ひしが。後には故郷なればとて此國に歸り。終にこゝにて空しくなる。跡のしるしも此草堂の。露と消えにし其跡なり。ワキ、「ふしぎやさては古の。其名に聞えし佛御前の。なき跡までも名をとめて。シテ、「佛の原といふ名所も。昔を留むる名残なれば。ワキ、「今甲ひも疑なき。成佛の縁ある其人の。シテ、「名も頼もしや一佛成

道。ワキ、「觀見法界。シテ、「草木國土。シテ、「ワキ、「悉皆成佛と聞く時は。地佛の原の草木まで。佛の原の草木まで。皆成佛は疑はず。ありがたやなりからの。野もせにすだく虫の音まで。聲佛事をやなしぬらん。山風も夜嵐も。聲澄み渡る此原の。草木も心あるやらん。

ワキ、「猶猶佛御前の御事悉しく御物語候へ。地、「昔平相國の御時。妓王妓女佛刀白とて。温顔舞曲花めきて。世上に名を得し遊女ありしに。シテ、「始は妓王を召し置かれて。遊舞の籠愛甚しくて。地、「色香を飾る玉衣の。袖の白露起伏の。御簾の内を立ちさらで。さながら宮女の如くなりしに。シテ、「思はざるにかりを得て。地、「佛御前を召されしより。御心移りていつしかに。妓王は出だされ參らせて。シテ、「世を秋風の音更けて。地、「涙の雨もをやみもせず。げにや思ふ事。適はればこそ浮世なれ。われは本より優色の。花一時の盛なれば。散るを何と怨みんや。嵐は吹けども松はもとより常磐なり。いつ歎きいつ驚かん浮世ぞと。思へばかかるかりふしの。來るこそ教なれ。しかも迷を照すなる。シテ、「彌陀の御國もそなたぞと。地、「頼をかけて西山や。う

き世の嵯峨の奥深き。草の庵に隠れがの。隠れて住むと思ひしに。思ひの外なる佛御前の。様をかへ來りたり。こはそもさるにても。かく捨つる身となりぬれど。猶も御身の恨めしさの執心は残るに。そもかゝる心持つ人かや。今こそ眞の佛にてましますとて。妓王は手を合せ。感涙を流すばかりなり。

地「昔語はさて置きぬ。さて今跡をとひ給ふ。御身いかなる人やらん。シテ「われは誰とか岩代の。松の葉結ぶ露の身の。行くへを何と問ひ給ふ。地「行くへ何處と白雪の。跡を見よとは此原の。シテ「草の庵はこゝなれや。地「露の身の置く。シテ「草堂の。地「主は佛よといひ捨てて。立ち去る影は草衣。尾花が袖の露分け。草堂の内に入りにけり。草堂の内に入りにけり。(申入)ワキ「松風寒き此原の。松風寒き此原の。草の假寝のとはに。御法をなして夜もすがら。かの跡とふぞありがたき。かの跡とふぞありがたき。後シテ(佛御前)「あら有難の御經やな。はや明方にもなるやらん。遠寺の鐘も幽に響き。月落ちかかる山葛の。嵐烈しき假寝の床に。夢ばし覺まし給ふなよ。ワキ「不思議やな佛の原の草枕

に。優女の影の見え給ふは。いかさま聞きつる佛御前の幽靈にてぞましますらん。シテ「聴かしながらいにしへの佛といはれし名を便りにて。輪廻の姿も歌舞をなす。ワキ「極樂世界の御法の聲。シテ「佛事をなすや。ワキ「此原の。シテ「佛の舞の妙なる袖。地「草木も靡く氣色かな。(序ノキ)シテ「ひとり猶。佛の御名を尋ね見ん。地「おのおのかへる法の場人。法の場人の。シテ「法の教も幾程の世ぞや。地「前佛は過ぎぬ。シテ「後佛は未だなり。地「夢の中間は。シテ「この世のうちぞや。地「鐘も響き。シテ「鳥も音をなく。地「よはのうなる夢幻の。一睡のうちぞ佛もあるまじ。まして人間も。シテ「嵐吹く雲水の。地「嵐吹く雲水の。天に浮める波の。一滴の露の始をば。何とか返す舞の袖。一步擧げざる先をこそ。佛の舞といふべけれど。誰ひ捨てし失せにけりや。誰ひ捨てし失せにけり。

九十四 善知鳥

シテ 千代堂 ワキ 旅僧

ワキ(旅僧)「これは諸國一見の僧にて候。われ未だ陸奥卒都の濱を見ず候ほどに。此度思ひ立ち卒

都の濱一見と志して候。又よきついでなれば(三字合にて候。たてやませんぢやうえん)立山禪定申さばやと存じ候。急ぎ候ほどに。是ははや立山に著きて候。心靜に一見せばやと思ひ候。さてもわれ此立山に來て見れば。まのあたりなる地獄の有様。見ても恐れぬ人の心は。鬼神より猶恐るしや。山路に分つ衢の數。多くは悪趣の嶮路ぞと。涙も更に留めえぬ(金剛流の外は「留」めえずと誦ふ)。慚愧の心時過ぎて。山下にこそは下りけれ。山下にこそは下りけれ。

シテ(教師附録)「のうのうあれなる御僧に申すべき事の候。ワキ「何事にて候ぞ。シテ「陸奥へ御下り候は言傳申し候べし。卒都の濱にては獵師にて候ひし(二字合)もの。去年の秋みまかりて候。其妻や子の宿を御尋ね候ひて。それに候蓑笠手向けてくれよと仰せ候へ。ワキ「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。届け申すべき事は易きほどの御事にて候さりながら。上の空に申してはやはか御承引候べき。シテ「げに確なるしるしなくてはかひあるまじや。思ひ出でたりありし世の。今はの時まで此尉が。黒木曾の麻衣の袖を解きて。地「これをしるしにと。涙を添へて旅衣。涙を添へて旅衣。立ち別れ行く其跡は。雲や煙の立山の。木の芽も萌ゆる遙遙と。客僧は奥へ

下れば。亡者は泣く泣く見送りて。行く方知らずなりにけり行く方しらすなりにけり。(中入)ツレ(善)「げにや本よりも定めなき世の習ぞと。思ひながらも夢の世の。あだに契りし恩愛の。別の後の忘れがたみ。それさへ深き悲の。母が思をいかにせん。

ワキ「誰に此屋の内へ案内申し候はん。ツレ「誰にて渡り候ぞ。ワキ「これは諸國一見の僧にて候が。立山禪定申し候ところにて。其様冷しげなる(三字合)老人のありしが。陸奥へ下らば言傳すべし。卒都の濱にて獵師の宿を尋ねて。それに候蓑笠手向けて賜はり候へと申すべきよし仰せられしほどに(卒都の濱にて以下各流多少の異同あり。今觀世流にては「卒都の濱にては獵師にて候者の、去年)上の空に申しては。

やはか御承引候べきと申して候へば。其時召されたる麻衣の袖を解きて賜はりて候ほどに。これまで持ちて参りて候。もし思し召しあはする事の候か。ツレ「誰「これは夢かや淺ましや。四手の田長の亡き人の。上聞きあへぬ涙かな。詞さりながら餘りに心もとなき御事なれば。誰いざや形見を蓑代衣。間遠に織れる藤袴。ワキ「頃も久しきかたみながら。ツレ「今取り出だし。ワキ「よく見れば。地「疑も。夏立つ今日の薄衣。夏立つけふの薄衣。一重なれども合はすれば。袖あり

けるぞあら 懐しのかたみや。やがて其まゝ、甲の。御法を重ね敷敷の。中に亡者の望むなる。蓑笠をこそ手向けけれ。蓑笠をこそ手向けけれ。ワキ南無幽霊出離生死 頓證菩提。後ジテ(坂師)陸奥の。卒都の濱なる呼子鳥。鳴くなる聲は。うとうやすかた。一見卒都婆永離三惡道。此文の如くば。譬ひ拜し申したりとも。永く三惡道をば遁るべし。いかにいはんや此身のため。造立供養にあづからんをや。譬ひ紅蓮大紅蓮なりとも。名號智火には消えぬべし。焦熱大焦熱なりとも。法水には勝たじ。さりながら此身は重き罪科の。心はいつかやすかたの。鳥獸を殺し。地衆罪如霜露惠日の日に。照し給へ御僧。所は陸奥の。所は陸奥の。奥に海ある松原の。下枝に交る沙蘆の。未引きしなる浦里の。籬が鳥の昔屋形。圍ふとすれど疎にて。月のためには卒都の濱。心ありける住まひかな。心ありける住まひかな。ツレ、誰あればとも云は、形や消えなんと。親子手に手を取り組みて。泣くばかりなる。有様かな。シテ「哀やげにいにしへは。さしも契りし妻や子も。今はうとうの音に泣きて。やすかたの鳥の安がらすや。何しに殺しけん。わが子のいとほしき如くにこそ。鳥獸も思ふらめと。千代童がかみ

かき撫でて。あらなつかしやといはんとすれば。地横障の。雲の隔が悲しやな。雲の隔が悲しやな。今まで見えし姫小松の。はかなやいづくに。木隠れ笠ぞ津の國の。和田の笠松や箕面の瀧津波も我が袖に。立つや卒都婆のそとはたれ。蓑笠ぞ隔なりけるや。松島や。小島の昔屋うちゆかし。われは卒都の濱千鳥。音に立て、泣くより外の事をなき。往事渺茫としてすべて夢に似たり。舊遊零落して半泉に歸す。シテ「とても渡世を營まば。士農工商の家にも生れず。地又は琴基書畫を嗜む身ともならず。シテ「唯明けても暮れても殺生を營み。地運運たる春の日も所作足られば時を失ひ。秋の夜長し夜長けれども。漁火白うして眠る事なし。シテ「九夏の天も暑を忘れ。地「立冬の朝も寒からず。鹿を追ふ獵師は山を見ずといふ事あり。身の苦しきも悲しさも。忘草の追鳥。高繩をさしひく汐の末の松山風荒れて。袖に波越す沖の石。又は干潟とて。海越しなりし里までも。千賀の鹽竈身を焦す。報をも忘れける事業をなしし悔しさよ。そもそもうとう。やすかたのとりどりに。品變りたる殺生の。シテ「中に無慙やな此鳥の。地「愚なるかな筑波嶺の。木木の梢にも羽を敷き。波の浮巢をもかけなかし。平沙に子を生みて落鷹の。はかなや

親は隠すとすれど。うとうと呼ばれて子はやすかたと答へけり。さてぞ取られやすかた。シテうとう。地親は空にて血の涙を。親は空にて血の涙を。降らせば濡れじと菅蓑や。笠を傾けこい。かしこの。便を求めて隠笠。隠蓑にもあらざれば。猶降りかゝる血の涙に。目も紅に染み渡るは。紅葉の嘴の鵲か。婆婆にては。うたうやすかたと見えしも。うたうやすかたと見えしも。冥途にしては化鳥となり。罪人を追つ立て鉄の。嘴を鳴らし羽をたき。銅の爪を磨ぎ立てては眼をつかんで肉を。さげばんとすれども猛火の煙にむせんで。聲を上げ得ぬは。鴛鴦を殺しし科やらん。遁れんとすれど立ち得ぬは。羽脱鳥の報か。シテうたうは却つて鷹となり。埒われは雉とぞなりたりける。遁れ交野の狩場の吹雪に。空も恐ろし地を走る。犬鷹に責められて。あら心うとうやすかた。安き隙なき身の苦を。助けてたべや御僧。助けてたべや御僧と。云ふかと思へば失せにけり。

九十五 小 鹽

シテ 在原業平(前は翁) ワキ男

ワキ(男)、ワキヅレ、鹽、花にうつろふ嶺の雲。花にうつろふ嶺の雲。かゝるや心なるらん。ワキ、「かやうに候者」は下京邊に住まひする者にて候。さても大原野の花。今を盛なるよし承り及び候あひだ。若きひとびとともな。人入を伴ひ(今親世金剛三流にては、此間に「申」の二字を添へて誦す)。唯今大原山へと急ぎ候。露面白やいづくはあれど所から。花も都の名にし負へる。大原山の花櫻。今を盛と木綿花の。今を盛と木綿花の。手向の袖も一入に。色そふ春の時を得て。神も交はる塵の世の。花や心に任すらん。花や心に任すらん。シテ(翁)、「乘して。花をかざしの袖ながら。老木の柴と人を見ん。年古れば齡は老いぬしかばあれど。花をし見れば物思も。なしと詠みしも身の上に。今白雪を戴くまで。光に當る春の日の。長閑けき御代の時なれや。散りもせず。咲きも残らぬ花盛。咲きも残らぬ花盛。四方の氣色も一しほに。匂ひ満ち色に添ふ。情の道に誘はる。老いな厭ひそ。花心。老いな厭ひそ。花心。ワキ、「うたうふしぎやな貴賤群集の其中に。殊に年たけたる老人花の枝をかざし。さも花やかに見え給ふは。そも何處より來り給ふぞ。シテ「思ひよらずや貴賤の中に。わきて言葉をかけ給ふは。さも心なき山賤の。身にも應ぜぬ花すきぞと。御笑ひあるか人人よ。婆婆こそ山のかせきに似たりとも。心は花になら

ばこそ。なさばならめや心からに。地をかしとこそは御覽すらめ。よしや此身は埋木の。朽ちは果てしなや。心の色も香も知る人ぞ知らずな問はせ給ひそ。ワキ、詞、あら面白の戯やな。よも真には腹立ち給はじ。いか様ゆるある心言葉の。奥ゆかしきを語り給へ。シテ、何と語らん花盛。いふに及ばぬ氣色をば。いかやは思ひ給ふらん。ワキ、詞、げにげに妙なる楢の色。うつろふ蔭も大原や。シテ、詞、小鹽の山の小松が原より。煙る霞の遠山櫻。ワキ、詞、里は軒端の家櫻。シテ、詞、匂ふや窓の梅も咲き。ワキ、詞、茜さす日も紅の。シテ、霞か。ワキ、詞、雲か。シテ、八重。ワキ、詞、九重の。地、都邊は。なべて錦となりにけり。なべて錦となりにけり。櫻を折らぬ人しなき。花衣きにけりな。時も日も月も彌生。合ひに合ふ詠かな。げにや大原や。小鹽の山も今日こそは。神代も思ひ知られけれ。神代も思ひ知られけれ。ワキ、詞、かゝる面白き人に参りあひて候ものかな。此ま、御供申し。花をも眺めうするにて候。又唯今の言葉の末に。大原や小鹽の山もけふこそは。神代のことおもひ。神代の事も思ひ出づらめ。今所から面白う候。これはいかなる人の御詠歌にて候ぞ。シテ、事新しき問ひ事かな。此大原野の行幸に。在原の業平供奉し給ひし時。忝くも後の御事を思ひ出でて。神代のことと詠みしとなり。言申すにつけて我な

から。空恐ろしや天地の。神の御代より人の身の。妹背の道は浅からぬ。地、名殘小鹽の山深み。名殘小鹽の山深み、のぼりての世の物語。語るも昔。男。哀ふりぬる身の程。歎きてもかひなかりけり。歎きてもかひぞなかりける。地、賤げに山賤のさしもげに。しばふる人と見ゆるにも。心ありける姿かな。シテ、心知らればとても身の。姿に恥ぢぬ花の友に。馴れてさらば交らん。地、交れや交れ老人の。心若木の花の枝。シテ、老隱るやとかざさん。地、かざしの袖を引き引かれ。このもかものもの蔭ごと。シテ、貴賤の花見。地、輿車の。花の轆をかざしつれて。よるぼひさぞらひとりとどりに廻る。盃の。天も花にや酔へらん。紅。うづむ夕霞かげるふ人の面影。ありと見えつゝ失せにけり。ありと見えつゝ失せにけり。(中人)ワキ、詞、ふしぎや今の老人の。唯人ならず見えつるが。さては小鹽の神代の古跡。和光の影に業平の。花に詠じて衆生濟度の。姿現し給ふぞと。思の露もたまさかの。思の露もたまさかの。ひかりみ。花を見るも。花心。妙なる法の道のべに。猶も奇特を待ち居たり。猶も奇特を待ち居たり。後シテ(在原業平)月やあらぬ。春や昔の春ならぬ。我が身もとの身も知らじ。ワキ、詞、ふしぎやな今まで

は。立つとも知らぬ花見車の。やごとなき人の御有様。これはいかなる事やらん。シテ「げにや及ばぬ雲の上。花の姿はよも知らじ。詞ありし神代の物語。露姿現すばかりなり。ワキ「あらありがたの御事や。他生の縁は朽ちもせで。シテ「契りし人も様様に。ワキ「思ひぞいづる。シテ「花も今。地「今日「すは明日は雪とぞふりなまし。明日は雪とぞふりなまし。消えずはありと花と見ましやと詠せしに。今はさながら花も雪も。皆白雲の上人の。櫻がさしの袖ふれて。花見車暮るるより。月の花に待たうよ。

それ春宵一刻價千金。花に清香月に影。をしまるべきは唯此時なり。シテ「思ふ事いはで唯にや止めべき。地「われに等しき人しなれば。とは思へども人知れぬ。心の色はおのづから。思うちより言の葉の。露品品に洩れけるぞや。春日野の。若紫のすり衣。しのぶの亂れ知らずと詠せしに。陸奥のしのぶもちすり唯ゆる。亂れんと思ふわれならなくにと。詠みしも紫の。色に染み香にめでしなり。又は唐衣。著ついなれにしつましあれば。遙遙來ぬる旅をしぞ。思ふ心の奥までは。いさ白雲のくだり月の。都なれや東山。これも亦あづまの。はてしな人の心

や。シテ「武藏野は。けふはな焼きそ若草の。地「妻もこもれりわれも亦。こもる心は大原や。小鹽に續く通ひ路の。行くへは同じ戀草の。忘れめや今も名は。昔男そと人もいふ。シテ「昔かな。(序、舞)

地「昔かな。花も所も月も春。地「ありし御幸を。シテ「花も忘れじ。地「花も忘れぬ。シテ「心や小鹽の。地「やま風吹き亂れ。散らせや散らせ。散り迷ふ木のもとながらまどろめば。櫻に結べる夢か現かよいと定めよ。夢か現かよいと定めよ。寢てか覺めてか春の夜の月。曙の花にや残らん。

九十六

邯鄲

古名

邯鄲 枕

盧生 狂言 邯鄲の宿の主人

ワキ 子 方 夢中の主人

シテ(盧生)「浮世の旅に迷ひきて。浮世の旅に迷ひきて。夢路をいつと定めん。これは蜀の國の傍に盧生といへる者なり。詞われ人間にありながら佛道をも願はず。誰たい茫然と明し暮すばかりなり。詞眞や楚國の羊飛山に。貴き智識のまします由承り及びて候ほどに。身の一大事をも尋ればやと思ひ。唯今羊飛山へと急ぎ候。進行「住み馴れし。國を雲路のあとに見て。國を雲

路のあとに見て。山又山を越え行けば。そことしもなき旅衣。野暮れ山暮れ里暮れて。名にのみ聞きし邯鄲の。里にも早く著きにけり。里にも早く著きにけり。則急ぎ候ほどに。これははや邯鄲の里に著きて候。未だ日は高く候へども。此所に旅宿せうするにて候。いかに案内申し候。(狂言シカケ) シテ「これは旅人にて候。一夜の宿を御貸し候へ。(狂言シカケ) シテ「これは蜀の國の傍に虚生といへるものなり。われ人間にありながら佛道をも願はず。たゞ茫然と明し暮すところ。楚國の羊飛山に。尊き智識のまします。由承り及びて候ほどに。身の一大事をも尋ねばやと思ひ立ちて候。(狂言シカケ) シテ「さて其枕はいづくに御座候ぞ。(狂言シカケ) シテ「さらば立ち越え一睡見うするにて候。(狂言シカケ) (急ぎ候ほどに以下狂言の附終に各流多少の相違あれども) シテ「さてはこれなるが聞き及びし(及びし)今は(及)邯鄲の枕なるかや。これは身を知る門出の。世の試に夢の告。天の與ふる事なるべし。一雨の雨宿り。一雨の雨宿り。日はまだ残る中宿に。假寝の夢を見るやと。邯鄲の枕にふしにけり。邯鄲の枕にふしにけり。リキ(夢中の附使)「いかに虚生に申すべき事の候。シテ「そもいかなる者ぞ。ワキ「楚國の帝の御位を。

虚生に譲り申さんとの。勅使「これまで参りたり。シテ「思ひようすや王位には。そも何故に備はるべき。ワキ「是非をばいかではかるべき。御身代を持ち給ふべき。其瑞相こそましますらめ。はやや輿にめさるべし。シテ「こはそも何と夕露の。光かかやく玉の輿。乗りも習はぬ身の行くへ。リキ「誰かいるべきとは思はずして。シテ「天にもあがる。ワキ「心ちして。地「玉の御輿に法の道。玉の御輿に法の道。榮華の花も一時の。夢とは白雲の上人となるぞふしぎなる。ありがたの氣色やな。ありがたの氣色やな。本より高き雲の上。月も光はあきらけき。雲龍閣や阿房殿。光も満ち満ちて。げにも妙なる有様の。庭には金銀の砂を敷き。四方の門邊の玉の戸を。出で入る人まで。光を飾るよそはひは。眞や名に聞きし寂光の都喜見城の。樂もかくやと思ふばかりの氣色かな。千貨萬貨の御寶の。數を連れて捧げ物。千戸萬戸の旗のあし(四字無名)。天に色めき地に響く。雷(一字無名)の聲もおびたし。雷の聲もおびたし。シテ「東に三十餘丈に。地「銀の山を築かせては。こがれの日輪を出だされたり(北何無名)。シテ「西に三十餘丈に。地「黄金の山を築かせては。銀の月輪を出だされたり(北何無名)。たとへばこれは。長生殿の内には春秋を富め

たり(保胤の詩の「長生靈藥春秋を」とる曲にては「春秋」とどめたり)。不老門の前には。日月遅しといふこころをまなばれたり。

ワキツレ(雪中の大臣)「いかに奏聞申すべき事の候。御位に即き給ひては早や五十年なり。然らば此仙薬をきこしめさば。御年一千歳まで保ち給ふべし。さるほどに天の濃漿や沈瀝の盃。これまで持ちて参りたり。シテ「そも天の濃漿とは。ワキツレ「これ仙家の酒の名なり。シテ「沈瀝の盃と申すことは。ワキツレ「同じく仙家の盃なり。シテ「壽命は千代ぞと菊の酒。ワキツレ「榮華の春もよろづ年。シテ「君も豊に。ワキツレ「民祭え。地「國土安全長久の。國土安全長久の。榮華もいやましに。猶よろこひはまさり草の。菊の盃とりどりに。いざや飲まうよ。シテ「めぐれや盃の。地「めぐれや盃の。流は菊水の。流にひかれてとく過ぐれば。手まづ遮る菊衣の。花の袂を翻して。指すも引くも光なれや。盃の影の。めぐる空ぞ久しき。子方(雪中の仙人)「わが宿の。地「わが宿の菊の白露けふ毎に。幾世積りて淵となるらん。よも盡さじよも盡さじ。薬の水も泉なれば。汲めども汲めどもいやましに出づる菊水を。飲めば甘露もかくやらんと。こころも晴れやかに。飛び立つばかりありあけの。夜盡となきたのしみの。榮華にも榮耀にも。げにこの上やあるべき。(無)

シテ「いつまでぞ。榮華の春も常磐にて。地「猶幾久し有明の月。シテ「月人男の舞なれば。雲の羽袖を重ねつ。喜の歌を詠ふ夜もすがら。地「詠ふ夜もすがら日は又出でて。明らかくなりて。夜かと思へば。シテ「晝になり。地「晝かと思へば。シテ「月又さやけし。地「春の花咲けば。シテ「紅葉も色濃く。地「夏かと思へば。シテ「雪もふりて。地「四季をりなりは目の前にて。春夏秋冬萬木千草も。一日に花咲けり。面白やふしぎやな。かくて時過ぎ頃去れば。かくて時過ぎ頃去れば。五十年の榮華も盡きて。眞は夢のうちなれば。皆消え消えと失せ果て。ありつる邯鄲の枕の上。眠の夢は覺めにけり。

シテ「廬生は夢さめて。地「廬生は夢さめて。五十年の春秋の。榮華も忽に。唯茫然と起きあがりて。シテ「さばかり多かりし。地「女御更衣の聲と聞きしは。シテ「松風の音となり。地「宮殿樓閣は。シテ「邯鄲の假の宿。地「榮華の程は。シテ「五十年。地「さて夢の間は粟飯の。シテ「一炊

し身なりしに。シテ、然れば紅色を事とし。地、容顏美麗なりしかば。帝の叡慮淺からず。シテ、ある時玉藻の前が智恵をはかり給ふに。一事とて、こぼる事なし。進、經論、聖教、和漢の才。詩歌、管絃に至るまで。問ふに答の暗からず。シテ、心底曇なればとて。地、玉藻の前とぞ召されける。ある時帝は。清涼殿に御出なり。月卿雲客の。堪能なるを召し聚め。管絃の御遊ありしに。頃は秋の末。月まだ遅き宵の空の。雲の氣色冷ましく。うちしぐれ吹く風に。御殿の燭消えにけり。雲の上人立ち騒ぎ。松明とくと進むれば。玉藻の前が身より。光を放ちて。清涼殿を照しければ。光大内に満ち満ちて。畫圖の屏風萩の戸。闇の夜の錦なりしかど。光にかかやきて。ひとへに月の如くなり。シテ、帝それよりも。御惱とならせ給ひしかば。地、安倍の泰成占つて。勘狀に申すやう。これはひとへに玉藻の前が所爲なりや。王法を傾げんと。化生して來りたり。調伏の祭あるべしと。奏すれば忽に。叡慮もかばり引きかへて。玉藻化生を本の身に。那須野の草の露と。消し跡はこれなり。ワキ、國「かやうに委しく語り給ふ御身はいかなる人やらん。シテ、今は何をかつゝむべき。其古は玉藻の前。今は那須野の殺生石。其石魂にて候なり。ワキ、げにや

餘りの惡念。却つて善心となるべし。然らば衣鉢を授くべし。同じくは本體を。進、二度現し給ふべし。シテ、國「あら愧かしやわが姿。進、晝は淺間の夕煙の。地、立ちかへり夜になりて。立ちかへり夜になりて。懺悔の姿現さんと。夕闇の夜の空なれど。此夜はあかし燈火の。わが影なると思し召し。恐れ給はで待ち給へと石に隠れ失せにけりや。石に隠れ失せにけり。(中入)ワキ、國「木石心なしとは申せども。國、草木國土悉皆成佛と聞く時は。本より佛體具足せり。況んや衣鉢を授くるならば。成佛疑あるべからずと。花を手向け焼香し。石面に向つて佛事をなす。汝、元來殺生石。問ふ石靈。いづれの所より來り。今生かくの如くなる。進、急急に去れ去れ。自今以後汝を成佛せしめ。佛體眞如の善心となさん。攝取せよ。後、ジテ(野干)國「石に精あり水に音あり。風は大虚にわたる。地、像を今ぞ現す石の。二つに割るれば石魂、忽現れ出でたり。恐ろしや。ワキ、ふしぎやな此石二つに割れ。光の内をよく見れば。野干の形はありながら。さもふしぎなる仁體なり。シテ、今は何をかつゝむべき。天然にては班足太子の塚の神。大唐にては幽王の後褒姒と現じ。我が朝にては烏羽の院の。玉藻の前とはなりたる

なり。調「われ王法を傾げんと。假に優女の形となり。玉體に近づき奉れば御惱となる。既に御命をとらんと悦をなしし所に。善「安倍の泰成。調「調伏の祭を始め。壇に五色の幣帛を立て。玉藻に御幣を持たせし。善「肝膽を碎き祈りしかば。地「やがて五體を苦めて、やがて五體を苦しめて。幣帛をおつとり飛ぶ空の。雲居を翔り海山を。越えて此野に隠れ住む。善「其後勅使立つて。善「其後勅使立つて。三浦の介上總の介兩人に綸旨をなされし。那須野の化生の者を退治せよとの勅を受けて。野干は犬に似たれば。犬にて稽古あるべしとて。百日犬をぞ射たりける。これ犬追物の始とかや。善「兩介は狩装束にて。地「兩介は狩装束にて。數萬騎那須野を取りこめて。草を分つて狩りけるに。身を何と那須野の原に。顯れ出でしを狩人の。追つまくつさぐりにつけて。矢の下に射ふせられて。即時に命をいたづらに。那須野の原の露と消えても。猶執心は此野に残つて。殺生石となつて。人をとること多年なれども。今遇ひ難き御法を受けて。此後悪事をいたす事。あるべからずと御僧に。約束固き石となつて。約束固き石となつて。鬼神の姿は失せにけり。

九十八 野の宮

ワキ僧 六條御息所(前は里女)

ワキ(僧)調「これは諸國一見の僧にて候。われ此程は都に候ひて。落陽の名所舊跡残なく一見つかまつ仕りて候。又秋も末になり候へば。嵯峨野の方ゆかしく候間。立ち越え一見せばやと思ひ候。これなる森を入に尋ねて候へば。野の宮の舊跡とかや申し候ほどに。逆縁ながら一見せばやと思ひ候。賑われ此森に来て見れば。黒木の鳥居小柴垣。昔に變らぬ有様なり。こはそも何といひたる事やらん。よしよしかゝる時節に参りあひて。拜み申すぞありがたき。伊勢の神垣隔なく。法の教の道すぐに。こゝに尋ねて宮所。心も澄める夕かな。心も澄める夕かな。シテ(里女)調「花になれし野の宮の。花になれし野の宮の。秋より後はいかならん。折しもあれ物の寂しき秋暮れて。なほしをりゆく袖の露。身を碎くなる夕まぐれ。心の色はおのづから。千草の花に移るひて。衰ふる身の習かな。人こそ知られけふ毎に。昔の跡に立ち歸り。野の宮の森の木枯秋更けて。森の木枯秋更けて。身にしむ色の消えかへり。思へば古を何と忍ぶの草衣。き

てしもあらぬ假の世に。行きかへるこそ怨なれ。ゆきかへるこそ怨なれ。

ワキ、詞「われ此森の蔭に居て古を思ひ。心を澄ますなりふし。いとなまめける女性一人忽然と
きたり給ふは。いかなる人にてましますぞ。シテ「いかなる者ぞと問はせ給ふ。其方をこそ問ひ参ら
すべけれ。これは古齋宮に立たせ給ひし人の。假に移ります野の宮なり。然れども其後は此事
絶えぬれども。長月七日の今日は又。昔を思ふ年年に。人こそ知らぬ宮所を清め。御神事を
なすところにて。行くへも知らぬ御事なるが。來り給ふは憚あり。とくとく歸り給へとよ。ワキ、詞「い
やこれに苦しからぬ。身の行く末も定なき。世を捨人の數なるべし。さてさてこゝはふりにし
跡をけふことに。昔を思ひ給ふ。誰いはいかなる事やらん。シテ、詞「光源氏此所に詣で
給ひしは。長月七日の日けふに當れり。其時いさゝか持ち給ひし榊の枝を。忌垣の内にもさし置き給
へば。御息所とりあへず。神垣はしるしの杉もなきものを。詞「いかにまがへて折れる榊ぞ
と。詠み給ひしもけふぞかし。ワキ、詞「げに面白き言の葉の。今持ち給ふ榊の枝も。昔に變らぬ色
よのう。シテ、詞「昔に變らぬ色ぞとは。榊のみこそ常磐の蔭の。ワキ、詞「森の下道秋暮れて。シテ「紅

葉かつ散り。ワキ「浅茅が原も。地「うら枯の草葉に荒るる野の宮の。草葉に荒るる野の宮の。跡な
つかしきこゝにしも。其長月の七日の日も。けふにめぐり來にけり。ものはかなしや小柴垣。い
とかりそめの御住まひ。今も火焚屋のかすかなる。光はわが思内にある色や外に見えつらん。あ
らさみし宮所。あらさみし此宮所。ワキ、詞「猶猶御息所の。謂戀に御物語り候へ。
地「抑此御息所と申すは。桐壺の帝の御弟。前坊と申し奉りしが。時めく花の色香まで。妹背の
心淺からざりしに。シテ「會者定離の習もとよりも。地「驚くべしや夢の世と。ほどなくおくれ給ひ
けり。シテ「さてしもあらぬ身の露の。地「光源氏のわりなくも。忍び忍びに行き通ふ。シテ「心の
末のなどやらん。地「又絶え絶えの中なりしに。つらきものにはさすがに思ひはて給はず。はるけき野
の宮に分け入り給ふ御心と物哀なりけりや。秋の花昔衰へて。虫の聲もかれがれに。松吹く
風の響までも。寂しき道すがら。秋の悲も果なし。かくて君こゝに詣でさせ給ひつゝ。情をかけ
て様様の。言葉の露も色色の。御心のうちぞ哀なる。シテ「其後桂の御祓。地「白木綿かけて川波
の。身は浮草のよるべなき。心の氷に誘はれて。行くへも鈴鹿川。八十瀬の波にぬれぬれず。伊勢

まで誰か思はんの。言の葉はそひゆくこともためしなきものを親と子の多那の都路に赴きし心こそ怨たりけれ。

地、露げにや謂を聞くからに。唯人ならぬ御氣色。其名をなのり給へや。シテ「名のりても。かひなき身とて恥かしの。もりてやよそに知られまし。よしさらば其名もなき身ぞと訪はせ給へや。地、なき身と聞けばふしぎやな。さては此世をばかなくも。シテ「去りて久しき跡の名の。地、御息所は。シテ「われなりと。地、夕暮の秋の風。森の木の間夕月夜。影がすかなる木の下。黒木の鳥居の二柱に。立ち隠れて失せにけり。跡立ち隠れ失せにけり。(中入)ワキ、露「かたしくや。森の木蔭の苔衣。森の木蔭の苔衣。同じ色なる草むしる。思をのべてよもすがら。かの御跡をとふとかや。かの御跡をとふとかや。

後ジテ(六條御息所)「野の宮の。秋の千種の花車。われも昔にめぐり來にけり。ワキ「ふしぎやな月の光も幽なる。車の音の近づく方を見れば。細代の下簾思ひかけざる有様なり。いかさま疑ふ所もなく。御息所にてましますか。さもあれいかなる車やらん。シテ「いかなる車と問はせ給へば。

思ひ出でたり其昔。加茂の祭の車争ひ。主は誰とも白露の。ワキ「所狭きまで立て並ぶる。シテ「物見車の様様に。殊に時めく葵の上の。ワキ「御車とて人を拂ひ。立ち騒ぎたる其中に。シテ「身は小車のやる方も。なしと答へて立て置きたる。ワキ「車の前後に。シテ「ばつと寄りて。地、人人轍にとりつきつ。人だまの奥におしやられて。物見車の力もなき。身の程ぞ思ひ知られたる。よしや思へば何事も。報の罪によも洩れじ。身は猶うしの小車の。めぐりめぐり來ていつまでぞ。妄執を晴らし給へや。妄執を晴らし給へや。

後ジテ「昔を思ふ花の袖。地、月にとかへす氣色かな。(序ノ舞)後ジテ「野の宮の。月もむかしや思ふらん。地、影さみしくも森の下露。影さみしくも森の下露。シテ「身の置き所もあはれ昔の。地、庭のたゝすまひ。シテ「よそにぞかはる。地、氣色もかりなる。シテ「小柴垣。地、露うち拂ひ。訪はれしわれも其人も。唯夢の世と古りゆくあとなるに。誰松虫の音は。りんりんとして。風茫茫たる野の宮の夜すがら。なつかしや。こゝはもとよりかたじけなくも神風や。伊勢の内外の鳥居に出で入る。姿は生死の道を。神は受けすや。思ふらんと。

又車にうち乗りて火宅の門をや。出でぬらん火宅の門。

九十九 錦木

古名 錦塚 ワシチ 旅男 ツレ 女

ワキ(旅男)「げにや聞きても忍ぶ山。げにや聞きても忍ぶ山。其通路を尋れん。河「これは諸國一
見の僧にて候。われ未だ東國を見ず候ほどに。此度思ひ立ち陸奥の果までも修行せばやと思ひ
候。道行「いづくにも心とめじと行く雲の。心とめじと行く雲の。旗手も見えて夕暮の。空も重
なる旅衣。おくはそなたか陸奥の。希婦の里にも著きにけり。希婦の里にも著きにけり。
シテ(男)「ツレ(女)「希婦の細布をりをりの。希婦の細布をりをりの。錦木や名たてなるらん。シテ「陸奥
のしのぶもぢすり誰ゆゑに。亂れそめにしわれからと。シテ「ツレ「藻に住む虫の音に泣きて。い
つまで草のいつかさて。思を干さん衣手の。森の下露起きもせず。寝もせてよはを明かしては。春
の眺もいかならん。あさましや。そも幾程の身にしあれば。なほ待つ事のあり顔にて。思はぬ人を
思ひぬの。夢か現か寝てか覺めてか。これや戀慕の習なる。いたづらに過ぐる心は多けれど。身

になす事は涙川。流れて早き月日かな。流れて早き月日かな。げにや流れては。妹背の中の川
と聞く。妹背の中の川と聞く。吉野の山はいづくぞや。こゝは又心の奥か陸奥の。希婦の郡の名
にし負ふ。細布の色こそ變れ錦木の。千度百夜いたづらに。くやしき頼なりけるぞ。くやしき頼な
りけるぞ(「二字今)。ワキ「聞「ふしぎやなこれなる市人を見れば。夫婦とおぼしくて。女性の持ち
給ひたるは鳥の羽にて織りたる布と見えたり。又男の持ちたるは美しく彩り飾りたる木なり。い
づれもいづれもふしぎなる賣物かな。これは何と申したる物にて候ぞ。ツレ「これは細布とて機
り狭き布なり。シテ「これは錦木とて彩り飾れる木なり。いづれもいづれも當所の名物なり。これ
これ召され候へ。ワキ「げにげに錦木細布の事は承り及びたる名物なり。借何故の名物にて
候やらん。ツレ「聞「うたての仰候や。名に負ふ錦木細布の。其かひもなくよそまでは。聞きも及ば
せ給はぬよのう。シテ「聞「いややそれも御理。其道道に縁なき事をば。何としてしるしめさるべ
き。シテ「ツレ「見たてまつれば世を捨人の。戀慕の道の色にそむ。此錦木や細布の。しるしめさ
ぬは理なり。ワキ「あらおもしろの返答やな。さてさて錦木細布とは。戀路によりたるいはれ

よのう。シテ、調「なかなかの事。三年まで立て置く敷の錦木を。日ごとに立てて千束とも詠み。ツレ、調「又細布は機ばり狭くて。さながら身をも隠されば。胸あひがたき戀とも詠みて。シテ、恨にも寄せ。ツレ、名をも立てて。シテ、逢はぬを種と。ツレ、詠む歌の。地、錦木は。立てながらこそ朽ちにけれ。立てながらこそ朽ちにけれ。希婦の細布。胸合はじとやと。さしも詠みし細布の。機ばりもなき身にて。歌物語耻かしや。げにや名のみは岩代の。松の言の葉とり置き。夕日の影も錦木の宿りにいざや歸らん。宿りにいざや歸らん。

ワキ、調「なほなほ錦木細布のいはれ御物語り候へ。シテ、昔より此所の習にて。男女の媒には此錦木を作り。女の家の門に立つるしるしの木なれば。美しく彩り飾りてこれを錦木といふ。さるほどに逢ふべき男の錦木をば取り入れ。逢ふまじきをば取り入れれば。或は百夜三年までも立てしによつて千束とも詠めり。又此山陰に錦塚とて候。これこそ三年まで錦木立てたりし人の古墳なれば。とり置く錦木の敷ともに塚に築き籠めて。これを錦塚と申し候。ワキ「さらば其錦塚を見て。故郷(郷生の流にては故)の物語にし候べし教へてたまはり候へ。シテ、おういでいでさらば

教へ申さん。ツレ、調「あなたへ入らせ給へとて。シテ、夫婦のものは先に立ち。かの旅人を伴ひつ。地、希婦の細道分け暮して。錦塚はいづくぞ。かの岡に草刈るをのこ心して。人の通路あきらかに。教へよや道芝の。露をば誰に問はまし眞如の玉はいづくぞや。求めたくぞおぼゆる。シテ、秋寒げなる夕まぐれ。地、嵐木枯村時雨。露分けかれて足曳の。山の常陰も物さび。松桂に鳴く梟蘭菊の花に隠るなる。狐栖むなる塚の草。紅葉ばそめて錦塚は。これぞといひ捨てて。塚の内にぞ入りにける。夫婦は塚に入りにけり。(中入)

ワキ、調「牡鹿の角の束の間も。牡鹿の角の束の間も。寝られんものか秋風の。松の下臥夜もすがら。聲佛事をやなしぬらん。聲佛事をやなしぬらん。ツレ、調「いかに御僧。一樹一河の流を汲むも。他生の縁ぞと聞くものを。ましてや値遇のあればこそ。かく宿りする草の枕の。夢ばし覺まし給ふなよ。あらたつとの御法やな。シテ、あらありがたの御用ひやな。二世とかれたる契だにも。さしも三年の日敷積る。此錦木の遇ひがたき。法の値遇のありがたきよ。いでいで姿を見せ(今、見せ)申さん。今こそは色に出でなん錦木の。地、三年は過ぎぬ古の。シテ、夢又夢に。今宵三年

の値遇に今ぞかへるなれと。地「尾花がもとの思ひ草の。陸より見えたる塚のまぼろしに。現れ出づるを御覽せよ。シテ「いふならく。奈落の底に入りぬれば。刹利も首陀もかはらざりけり。かはらざりけり。あら恥かしや。ワキ「ふしぎやなさも古塚と見えつるが。内はかゝやく燈火の。影あきらかなる人家の内に。機物を立て錦木を積みて。昔を現す粧たり。これは夢かや現かや。ツレ「かきくらす心の暗に惑ひにき。夢現とはよひと定めよ。シテ「聞げにや昔に業平も。世人定めよといひしものを。夢現とは旅人こそ。よくよく御覽じ給ふ(五字今は「いろし」へけれ。ワキ「夢よし夢なりとも現なりとも。はやはや昔を現して。夜すがらわれに見せ給へ。シテ「いでいで昔を現さんと。夕影草の月の夜に。ツレ「女は塚の内に入りて。秋の心も細布の。機物を立てて機を織れば。シテ「夫は錦木とり持ちて。閉したる門を叩けども。ツレ「内より答ふることもなく。ひそかに音するものとは。シテ「機物の音。ツレ「秋の虫の音。シテ「聞けば夜聲も。ツレ「きり。シテ「はたり。ツレ「ちやう。シテ「ちやう。地「きりはたりちやうちやう。きりはたりちやうちやう。機織松虫きりぎりす。つづりさせよとなく虫の。衣のためかなわびそ。おのがすむ野の。千種の糸の。

細布織りてとらせん。

げにや陸奥の希婦の郡の習とて。所からなる事業の。世にたぐひなき有様かな。シテ「申しつるだに憚なるに。なほも昔を現せとの。地「御僧の仰に隨ひて。織る細布や錦木の。千度百夜を經るとても。此執心はよも盡さじ。シテ「然れども今遇ひがたき縁によりて。地「妙なる一乗妙典の。功力を得んと懺悔の姿。夢中になほも現すなり。夫は錦木を運べ。女は内に細布の。機織虫の音に立てて。問ふまでこそなけれども。互に内外にあるぞとは。知られ知らるゝ中垣の。草の戸さしは其まゝにて。夜はすでに明けければ。すこすこと立ち歸りぬ。さるほどに。思の數も積りきて。錦木は色朽ちて。さながら苔に埋木の。人知れぬ身ならば。かくて思ひもとまるべきに。錦木は朽つれども。名は立ちそひて逢ふことは。涙も色に出でけるかや。戀の染木とも。此錦木を詠みしなり。シテ「思ひきや。榻のはしがきかきつめて。地「百夜も同じまるれせんと。詠みしだにあるものを。せめては一年待つのみか。二年餘りありありて。はや陸奥のけふまでも。年くれなるの錦木は。千度になればいたづらに。われも門邊に立ち居り。錦木とともに朽ちぬべき。袖の涙

のたまさかにも。などや見みえ給はぬぞ。借いつか三年は満ちぬ。あらつれなつれなや。
 地錦木は。シテ千束になりぬ今こそは。地人に知られぬ聞のうち見ぬ。シテうれしやな。今宵
 鸚鵡の盃の。地雪をめぐらす舞の袖かな。雪をめぐらす舞の袖かな。シテ舞をまひ。地舞を
 まひ。歌をうたふも妹背の媒。たつるは錦木。シテ織るは細布の。地とりどりさまさまの夜遊
 の盃に映りて。有明の影恥かしや。有明の影恥かしや。あさまにやなりなん。覺めぬ先こそ夢人
 なるもの。覺めなば錦木も細布も。夢も破れて。松風颯颯たる朝の原の。野中の塚とぞなりに
 ける。

百 唐 船

古名 祖慶官人

子方 祖慶官人

子方 唐土二人

ワキ(箱崎殿)問「かやうに候者は。九州箱崎の何某にて候。借も一年唐土と日本と船の争あつて。
 日本に舟をば唐土に留め。唐土の船をば日本に留め置きて候。某も船を一艘留め置きて候。其船
 に祖慶官人と申す者を留め置きて候が。はや十三回になり候。某は牛馬をあまた持ちて候は

どに。かの祖慶官人に申し付け野飼をさせ候。今日も申しつけばやと存じ候。

唐土二人降「唐土船の楫枕。夢路程なき名残かな。ソシテこれは唐土明州の津に。そんしそい
 うと申す兄弟の者なり。二人「扱もわが父官人は。一年日本の賊船に捕はれ。きのふけふとは思
 へども。十三回にはやなりぬ。餘りに父の戀しさに。未だ此世にましまさば。今一度對面申さ
 んと。思ひ立つ日を吉日と。船の纜解きはじめ。明州河を押し渡り。明州河を押し渡り。
 海漫漫と漕ぎ行けば。はや日の本もほの見えて。心筑紫の果にある。忍びし妻を松浦湯。浪
 路はるかに行く程に。名にのみ聞きし筑紫路や。箱崎に早く著きにけり。箱崎に早く著きにけ
 り。(狂言シカケ)

ワキ問「唐土の人のわたり候か。ソシテこれに候。祖慶官人未だ存生にて。箱崎殿に召し使は
 れ候よし承はり候ほどに。數の寶に代へ連れて歸國仕るべきために。唯今此所に渡りて候。
 ワキ「さん候祖慶官人は未だ存生にて候。唯今物詣とて御出で候。暫くそれに御待ち候へ。御
 歸り候はばひきあはせ申し候べし。ソシテさらばこれに待ち申さうするにて候。

シテ祖慶官人、語「いかにあれなるわらんべども。野飼の牛を集めつつ。はやはや家路に急ぐべし。日本子二人、かゝる業こそ物憂けれ。シテよしわれのみか天の原。七夕のたとへにも似ぬ身の業の。シテ、子二人、牛ひく星の名ぞしるまき。子二人、秋咲く花の野飼こそ。老の心のなぐさめなれ。シテ、これは唐土明州の津に。祖慶官人と申す者なり。問われ圖らざるに日本に渡り。問牛馬をあつかひ草刈笛の。高麗唐土をば名にのみ聞きて過ぎし身の。あら故郷戀しや。問かくて年月を送るほどに二人の子を持つ。又唐土にも二人の子あり。かれらが事を思ふ時は。それも戀しく。又これもいとほしし。一方ならぬ箱崎の。二人の子どもなかりせば。老木の枝は雪折れて。此身の果はいかならん。地、あれを見よ。野飼の牛の聲に。野飼の牛の聲に。子ゆるるに物や思ふらん。況んや人倫においておや。我が身ながらも愚なり。我が身ながらも愚なり。いざや家路に歸らん。いざや家路に歸らん。子二人、語「いかに父御よきこしめせ。さて住み給ふ唐土に、牛馬をば飼ふやらん御物がたり候へ。シテ、なかなかなれや唐土の、華山には馬を放し、桃林に牛をつなぐ。これ花の名所なり。子二人、さて唐土と日本の本は。いづれ優りの國やらん。委しく語り給へや。

おろか 愚なりとよ唐土に。日の本を喩ふれば。唯今尉が牽いて行く。九牛が一毛よ。子二人、さほど樂しむ國ならば。痛はしやさこそげに。戀しくおぼしめすらめ。シテ「いやとよかたがたを。舉げて後は唐衣。歸國の事も思はずと。地、語り慰み行くほどに。嵐の音の少なきは。松原や末になりぬらん箱崎にはやく著きにけり。箱崎にはやく著きにけり。ワキ、問「いかに祖慶官人。何とて遅く歸りてあるぞ。シテ、さん候餘りに多き牛馬にて御座候ほどに。さて遅く罷り歸りて候。ワキ、尤にて候。又尋ねべき事の候隠さす申すべきか。シテ、これは今めかしき事を承り候ものかな。何事にててもあれ申し上げうするにて候。ワキ、さておことは唐土に二人の子を持ちてあるか。シテ、さん候子を二人持ちて候。ワキ、其名をそんしそいうと申すか。シテ、あらふしぎや。なにとて知るし召されて候ぞ。さやうに申し候。ワキ、其所んしそいう。汝未だ存生の由を聞き。數の寶に代へつれて歸國すべきために。唯今此所に渡りて候。シテ、これは思ひもよらぬ事にて候ものかな。さて其船はいづくに御座候ぞ。ワキ、此方へ來り候へ。あれにかゝりたる船こそ。かの兩人の船にて候へ。シテ、げにこれは某が船にて候。ワキ、さらば對面し候へ。シテ、餘りに見ぐるしく候ほどに

引き繕ひて給はり候へ。ワキ「心得申し候。シテ、やあいかにあれなるは唐土に留め置きたる二人の者か。唐土、二人、童名さん候。童名さんしそいうなり。シテ、これは夢かや夢ならば。二人、所は箱崎。シテ、明けやせん。地、春宵一刻その價千金も何ならず。子程の資もあらじ。唐土は心なき。夷の國と聞きつるに。か程の孝子ありけるよと。日本人も随喜せり。たふとや箱崎の。神も納受し給ふか。ソシ、いかに申し候。追風がおりて候急ぎ御船に召され候へ。シテ、いかに箱崎殿へ申し候。追風がおりて候ほどに船にのれと申し候。御暇申し候べし。ワキ「めでたうやがて御歸國候へ。日本子「あら悲しやわれらをも連れて御出で候へ。シテ、げにげに出船の習とてはたと忘れ候。今「忘れ」此方へ來り候へ。ワキ「暫く。祖慶官人の事は力なき事。此幼き者どもは。此所にて生れ相續の者にて候ほどに。いつまでも某召し使はうするにてあるぞ此方へ來り候へ。日本子「二人、唐「あら情なの御事や。大和撫子の花だにも。同じ種とて唐土の。唐紅に咲くものを。薄くも濃くも花は花。情なくこそ候へとよ。唐土「時刻うつりて適ふまじ。急ぎ御船にめされよと。はや纜をとくとくと。シテ「呼ぶ子もあれば。日本子「とりとむる。シテ「中にとりまらる。二人「父ひ

とり。地「たづきも知らず泣き居たり。身もがな二つ箱崎の。怨めしの心づくしや。たとへば親子を思ふ事。人倫に限らず。焼野の雉子夜の鶴。梁の燕も皆子ゆゑこそ物思へ。況んやわれらさなきだに。あすなも知らぬ老の身の。子ゆゑに消えん命は。何なかなかに惜しからじと。シテ「今は思へばとにかくに。地「船にも乗るまじとまるまじと。いはほにあがりて十念し。既にうき身を投げんとす。唐土や日の本の。子どもは左右にとりつきて。これをいかにと悲しめば。さすが心もよわよわと。なりゆく事ぞ悲しき。ワキ「調「よくよく物を案ずるに。物の哀れ知らざるは。唯木石に異ならず。殊更出船の障なれば。はやはや暇とらすぞ。とくととく歸國を急ぐべし。シテ「餘りの事のふしぎさに。更に眞と思はれず。ワキ「こはそも何の疑ぞや。当社八幡も御知見あれ。僞更にあるべからず。とくととく船に乗り給へ。シテ「誰「これは眞か。ワキ「なかなかに。地「ありがたの御事や。眞に諸天納受して。此子をわれらに與へ給ふかありがたや。かくて餘りの嬉しさに。時刻を移さず。暇申し候唐人は。船に取り乗りおし出だす。喜の餘りにや。樂を奏し船子ども。棹のさす手も舞の袖。わりか

ら浪の鼓の舞樂につれて面白や。(巻)
 陸には舞樂に乗じつつ。陸には舞樂に乗じつつ。名残おしする海づら遠くなりゆくまゝに。招
 くも追風。船には舞の。袖の羽風も追風とやならん。帆を引きつれて舟子ども。帆をひきつれて舟
 子どもは。喜び勇みて。唐土さしてぞ急ぎける。

百一 弓八幡

ワキ 高良明神(前は老翁)ツレ男
 從者

ワキ(從者)「陸」御代も榮行く男山。御代も榮行く男山。名高き神に參らん。御「そもそもこれは後宇
 多の院に仕へ奉る臣下なり。さても頃は二月初卯八幡の御神事なり。野曲のみざんなれば。陪從
 の參詣仕れとの宣旨を被り。唯今八幡山に參詣仕り候。進行、四つの海。波靜なる時な
 れや。波靜なる時なれや。八洲の雲も治まりて。げに九重の道すがら。往來の旅もゆたかにて。
 廻る日影も南なる。八幡山にも著きにけり。八幡山にも著きにけり。急ぎ候ほどに。八幡山に
 著きて候。心靜に神拜を申さばやと存じ候(今は「申さうする」)

シテ(老翁)「ツレ男」神祭る。日もきさらぎの今日とてや。のどけき春の景色かな。ツレ「花の都の空
 なれや。シテ、ツレ」雲も收まり風もなし。シテ「君が代は千代に八千代にさわれ石の。いはほとなり
 て苦のむす。シテ、ツレ」松の葉色も常磐山。緑の空も長閑にて。君安全に民篤く。關の戸ざしもさ
 さざりき。もとよしも君を守りの神國に。わきて誓も澄める夜の。月かげるふの石清水。絶えぬ流
 の末までも。生けるを放つ大悲の光。げにありがたき時世かな。神と君との道すぐに。歩をばこ
 ぶ此山の。松高き枝も連なる鳩の嶺。枝も連なる鳩の嶺。曇らぬ御代は久方の。月の桂の男山。
 げにもさやけき影に來て。君萬歳と祈るなる。神に歩をばこぶなり。神に歩をばこぶなり。
 ワキ「今日」今日は當社の御神事とて。參詣の人人多き中に。これなる翁錦の袋に入れて持ちたるは弓
 と見えたり。そも何處より參詣の人ぞ。シテ「これは當社に年久しく仕へ申し。君安全と祈り申
 す者なり。又これに持ちたるは桑の弓なり。身の及びなければ未だ奏聞申さず。唯今御參詣を待ち
 え申し。君へ捧げ物にて候。ワキ「ありがたしありがたし。まづまづめでたき題目なり。さて其弓
 を奏せよとは。私に思ひ寄りけるか。もし又當社の御託宣か。萬分きていはれを申すべし。

シテ、同「これは御言葉とも覺えぬものかな。けふ御參詣待ちをえ申し。桑の弓を捧げ申すこと。即ちこれこそ神慮なれ。ツレ、謠「其上聞けばちはやぶる。シテ、ツレ「神の御代には桑の弓。蓬の矢にて世を治めしも。すぐなる御代のためしなれ。よくよく奏し給へとよ。ワキ、げにげにこれは秦平の御代のしるしはあらはれたり。同「まづその弓を取り出だし。舊神前にて拜み申さばや。シテ、同「いやいや弓を取り出だしては。何の御用のあるべきぞ。ツレ、謠「昔唐土周の代を。治めし國のためしには。シテ、同「弓箭を包み干戈を納めし例を以つて。ツレ、謠「弓を袋に入れ。シテ、同「劍を箱に納むること。ツレ、同「泰平の世（今は御代）のしるしなれ。シテ、ツレ「それは周の代これは本朝。名にも扶桑の國を引けば。同「桑の弓。とるや蓬の八幡山。とるや蓬の八幡山。誓の海もゆたかにて。君は船。臣は瑞穂の國國も。残りなくなびく草木の。惠も色もあらたなる。御神託ぞめでたき。神託ぞめでたかりける。

を鎮め給ひしより。地、同「同じく應神天皇の御聖運。御在位も久し國富み民も豊に治まる天が下。今に絶えせぬ御つきとかや。上雲上の月卿より。下萬民に至るまで。樂の聲つきもせず。然りとは申せども。君を守りの御惠。猶も深きゆゑにより。欽明天皇の御宇かとも。豐前の國宇佐の郡蓮臺寺の麓に。八幡宮と現れ。八重旗雲をしるべにて。洛陽の南の山高み。曇らぬ御代を守らんとて。石清水いさぎよき。靈社と現じ給へり。されば神功皇后も。異國退治の御ために。九州四王寺の峰に於いて。七箇日の御神拜。例も今は久方の。天の岩戸の神遊。群れ居て謠ふや榊葉の。青和幣白和幣。とりどりなりし神靈を。シテ、同「うつすや神代の跡すぐに。地、今も道ある政事。普しやひもろぎの。をかたまの木の枝に。金の鈴を結びつけて。ちはやぶる神遊ひ。七日七夜の御神拜。眞に天も納受し。地神も感應の海山。治まる御代に立ちかへり。國土を守り給ふなる。八幡三所の神託ぞめでたかりける。

地、同「げにや誓も影高き。げにや誓も影高き。此きさらざの神祭。かゝる神慮ぞありがたき。シテ「ありがたき千代の御聲を松風の。更け行く月の夜神樂を。奏して君を祈らん。地、祈る願も瑞

離がきの。久ひさしき代よより仕つかへてき。シテわれは眞まことは世よ世よを経て。地いま今このと此こ年なるまなるまで。シテ生いけるを放はなす(今は「放つ」)。地かはら高良の神しんとはわれなるが。此この御代みよを守らんと。唯ただ今いまこゝに來きたりたり。八幡大菩薩はちまんたいはつまつの御神託ごしんたくぞ疑うたがふなとて。かき消けすやうに失うせにけり。かき消けすやうに失うせにけり。(中入)

ワキ「都に歸り神勅を。都に歸り神勅を。悉く奏しあぐべしと。いへば御山も音楽の。聞えて異香薫すなり。げにあらたなる奇特かな。げにあらたなる奇特かな。」

後後ジテ(高良明神)「謠もとよりも人の國より我が國。他の人よりも我が人と。誓の末も明らけき。眞如實相の槻弓の。八百萬代に至るまで。動かす絶えず君守る。高良の神とは我が事なり。地「きさらぎの。初卯の神樂おもしろや。シテ謠へや謠へ日影さすまで。地「袖の白木綿返す返すも。千代の聲聲謠ふとかや。(神舞)

地「げにや末世といひながら。げにや末世といひながら。神の威光はいやましたに。かくあらたなる御影向。拜むぞ貴かりける。シテ君を守りの御惠。もとより定ある上に。ことに此君の神

徳とく天下てんが一いつ統つうと守まもるなり。地「げにげに神代今の代の。しるこの箱の明かに。シテ此山上に宮居せし。地「神の昔は。シテ久方の。地「月の桂の男山。さやけき影は所から。畜類鳥類鳩吹く松の風までも。皆神體と現れ。げにたのもしき神心。示現大菩薩八幡の。神託ぞゆたかなりける。神託ぞゆたかなりける。

百一 鉢木

ワキ佐野常世(前は旅僧) ワツヅレ同妻

ワキ「旅僧(前)「行くへ定めぬ道なれば。行くへ定めぬ道なれば。こし方もいづくならまし。地「これは一所不住の沙門にて候。われ此程は信濃の國に候ひしが。餘りに雪深くなり候ほどに。まづ此度は鎌倉に上り。春になり修行に出でばやと思ひ候。修行「信濃なる。淺間の嶽に立つ煙。淺間の嶽に立つ煙。遠近人の袖寒く。吹くや嵐の大井山。捨つる身になき友野里。今ぞうき世を離れ坂。墨の衣の碓氷川。下す筏の板鼻や。佐野のわたりに著きにけり。佐野のわたりに著きにけり。ワキ「急ぎ候ほどに。上野の國佐野のわたりに著きて候。あら笑止や。又雪の降り來りて候。此所

に宿を借らばやと思ひ候。いかに此屋の内へ案内申し候。ツレ(佐野世)「誰にてわたり候ぞ。ワキ「これは修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。ツレ「易き御事にて候へども。主の御留守にて候ほどに。お宿は適ひ候まじ。ワキ「さらば御歸までこれに待ち申さうするにて候。ツレ「それはともかくもにて候。わらはは外面へ出て迎ひ。此由を申さばやと思ひ候。

シテ(佐野世)「あ、降つたる雪かな。いかに世にある人の面白う候らん。それ雪は鶴毛に似て飛んで散らん。人は鶴壁を著て立つて徘徊すといへり。されば今降る雪も。もと見し雪にかはらねども。われは鶴壁を著て立つて徘徊すべき。袂も朽ちて袖せばき。細布衣陸奥の。けふの寒さなにかにせん。あら面白からずの雪の日やな。何あら思ひよらずや。此大雪に何とてこれに佇みて御入り候ぞ。ツレ「さん候。修行者の御入り候が。一夜の御宿と仰せ候ほどに。御留守の由申して候へば。御歸まで御待ちあらうするよし仰せ候ほどに。これまで参りて候。シテ「さて其修行者はいづくにわたり候ぞ。ツレ「あれに御入り候。ワキ「われらが事にて候。未だ日は高く候へども。餘りの大雪にて前後を忘れて候ほどに。一夜の宿を御貸し候へ。シテ「易きほどの(三字今)御

事にて候へども。餘りに見苦しく候ほどに。御宿は適ひ候まじ。ワキ「いやいや見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御貸し候へ。シテ「とめ申したくは候へども。われ(今は此間に「ら)夫婦さへ住みかねたる體にて候ほどに。なかなか御宿は思ひもよらぬ事にて候。これより十八町彼方に出本の里とてよき泊の候。日の暮れぬさきに一足も早く御出で候へ。ワキ「借はしかと御貸しあるまじにて候が。シテ「御痛はしくは存じ候へども。御宿は参らせがたう候。ワキ「あら曲もなや。よしなき人を待ち申して候ものかな。

ツレ「淺ましや我らかやうに衰ふるも。前世の戒行拙きゆゑなり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ。後の世の便ともなるべけれ。然るべくは御宿を参らせ給ひ候へ。シテ「調「さやうに思し召さば。何とて以前には承り候はぬぞ。いや此大雪に遠くは御出で候まじ。某「追つつきとめ申し候べし。のうのう旅人御宿参らせうのう。餘りの大雪に申す事も聞えぬげに候。痛はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ。今ふる雪に行き方を失ひ一所にたすみて。袖なる雪をうち拂ひうち拂ひし給ふ氣色。古歌の心に似たるぞや。駒とめて。袖うち拂ふかげもなし。

佐野のわたりの雪の夕暮。かやうに詠みしは大和路や。三輪が崎なる佐野のわたり。地、こ
 れは東路の。佐野のわたりの雪の暮に。迷ひつかれ給はんより。見苦しく候へど一夜は泊り給へ
 や。げにこれも旅の宿。げにこれも旅の宿。かりそめながら値遇の縁。一樹の陸のやどりも此世
 ならぬ契なり。それは雨の木陰。これは雪の軒ふりて。憂き寝ながらの草枕。夢より霜や結ぶら
 ん。夢より霜や結ぶらん。

シテ、問「いかに申し候。御宿は申して候へども。何にても候へ参らせうするものもなく候はいかに。
 ツレ」をりふしこれに粟の飯の候ほどに。苦しからずは参らせられ候へ。シテ「さらば其よし申し候
 べし。いかに申し候。御宿をば参らせて候へども。何にても参らせうするものもなく候。をりふし
 これに粟の飯のあるよし申し候。苦しからずは聞し召され候へ。ワキ「それこそ日本一の事にて候
 賜はり候へ。シテ」のうきこしめされうすると仰せ候。急いで参らせられ候へ。ツレ「心得申し
 候。シテ」惣じて此粟と申すものは。古世にありし時は。歌に詠み詩に作りたるなこそ承りて候
 に。今は此粟を以つて身命をつぎ候。げにや鷹生が見し榮花の夢は五十年。其邯鄲の假枕。

一睡の夢のさめしも。粟飯炊く程ぞかし。あはれやげに我もうちも寝て。夢にも昔を見るならば、
 慰も事もあるべきに。蓋「のう御覽せよかほどまで。地」住みうかれたる古里の。松風寒き夜も
 すがら。れられれば夢も見ず。何思ひ出のあるべき。

シテ、問「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあて参らせ候べき。や。思ひ
 出したる事の候。鉢の木を持ちて候。これを切り火に焚いてあて申し候べし。ワキ「げにげに鉢の
 木の候よ。シテ」さん候。某世にありし時は。鉢の木に「(野多流にては)すき數多木を集め持ちて候ひ
 した。かやうの體に罷りなり。いやいや木好きも無用と存じ。皆人に参らせて候さりながら。今も
 梅櫻松を持ちて候。あの雪持ちたる木にて候。某が秘藏にて候へども。今夜のおもてなしに。

これを(今此間に「火に」)焚きあて申さうするにて候。ワキ「いやいやこれは思ひもよらぬ事にて候。
 御志はありがたう候へども。自然又おこと世に出で給はん時の御慰にて候あひだ。なかなか思
 ひもよらす候。シテ「いやとても此身は埋木の。花咲く世にあはんこと。今此身にてはあひがたし。
 ツレ」唯いたづらなる鉢の木を。御身のために焚くならば。シテ、問「これを真に難行の。法の薪

と思し召せ。ツレツしかも此程雪降りて。シテ、仙仙人に仕へし雪山の薪。ツレツかかくこそあらめ。シテ「われも身を。地捨人のための鉢の木。切るとてもよしや惜しからじと。雪うち拂ひて見れば面白やかにせん。まづ冬木より咲きそむる。窓の梅の北面は。雪封じて寒きにも。異木よりまづ先だてば。梅をきりやそむべき。見じといふ人こそ憂けれ山里の。折りかけ垣の梅をだに。情なしと惜みしに。今さら薪になすべしと。かて思ひきや。櫻を見れば春ごとに。花少し遅ければ。此木や侘ぶると心を盡し育てしに。今は我のみわびてすむ。家櫻切りくべてひ櫻になすぞ悲しき。シテ「さて松はさしもげに。地「枝をため葉をすかして。かゝりあれと植ゑ置きし。そのかひ今は嵐吹く。松はもとより「煙（一字後世「常盤」と誤之は徳川時代に、徳川氏の松平姓に倣ありとて文味を考へ改めた）にて。薪となるも」とわりや（五字今は「梅」と誤り）切りくべて今ぞ御垣守。衛士の焚く火は御爲なり。よくよりてあたり給へや。ワキ、「近頃よき火にあたり寒さを忘れて候。シテ「御いでにより我らも火にあたり候。ワキ「いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ。承りたく候。シテ「いや某は名（「名字」と誤へり）もなき者にて候。ワキ「何と仰せ候とも唯人とは見え給はず候。自然の時の爲にて候。何の苦しう候べき御

名字を承り候へし。シテ「此上は何をか包み候べき。これこそ佐野の源左衛門の尉常世がなれる果にて候。ワキ「それは何とてかやうのさんさんの體にはなり給ひて候ぞ。シテ「其事にて候。一族どもに押領せられて。かやうの身となりて候。ワキ「のうそれは何とて鎌倉へ御上り候ひて。其御沙汰は候はぬぞ。シテ「運の盡くる所は。最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。かやうにおちぶれては候へども。御覽候へこれに武器一領長刀一えだ。又あれに馬をも一疋繫いで持ちて候。これは唯今にてもあれ鎌倉に御大事あらば。ちぎれたりとも此具足取つて投げ懸け。錆びたりとも長刀を持ち。瘦せたりともあの馬に乗り。一番に馳せ参じ著到につき。諸「偕合戦始まらば。地「敵大勢ありとても。敵大勢ありとても。一番に破つて入り。思ふ敵とよりあひ打ちあひて。死なん此身の。此まゝならば徒に。飢に疲れて死なん命。なんぼう無念の事ぞ（一字「無念」とあり。又「候ぞ」と誤り流義あり。これは「死」を重ねて誤りたるを本文に記入したるより生ぜし誤なり）ワキ「「よしや身の。かくてははてし唯頼め。われ世の中にあらんほど。又こそ参り候はめ。暇申して出づるなり。シテ「ツレツ名残惜の御ことや。初はつゝむ我が宿の。さも見苦しう候へど。しば

しは留り給へや。ワキ「留る名残のまゝならば。さて幾度か雪の日の。シテ、ツレ」空返え寒き此暮に。
 ワキ「いづくに宿を狩衣。シテ、ツレ」今日ばかり留り給へや。ワキ「名残は宿にとまれども。暇申し
 て。シテ、ツレ」御出でか。ワキ「さらばは常世。シテ、ツレ」又御入り。地「自然鎌倉に御上りあらば御尋
 れあれ。希有がる法師なり。かひがひしくはなけれども。公方の(二字今は「坂」)の縁になり申さん。御沙
 汰捨てさせ給ふなと。いひ捨てて出で船の。ともに名残や惜むらん。ともに名残や惜むらん。(申入)
 後ジテ(佐野常世)「蓋いかにあれなる旅人。詞鎌倉へ勢の上るといふは真か。何懸しく上るさぞある
 らん。東八ヶ國の大 名 小 名。思ひ思ひの鎌倉入り。さぞ見事にて候らん。白金物打つたる糸毛
 の具足に。金銀をのべたる太刀刀。飼ひに飼うたる馬に乗り。乗替中間さらびやかに。うち連れ
 うち連れ上るなかに。常世が常に變りたる。馬 物 具 や 打 物 の。物 其 物 に あ ら ざ る 氣 色 。 驚 さ
 ぞ笑ふらんさりながら。所存は誰にも劣るまじと。心ばかりは勇めども。勇みかれたる瘦馬の。あ
 ら道おそや。地「急げども急げども。弱きに弱き柳の糸の。シテ」よれによれたる瘦馬なれば。
 地「うてども爛れども。さきへは進まぬ足弱車の。乗力なければおひかけたり。

ワキ「聞いかに誰かある。ワキツレ(後吉)「御前に候。ワキ」國國の軍勢どもは皆皆来りたるか(今は「来りて」)。
 ツレ「さん候 悉く参りて候。ワキ」其諸軍勢の中に。いかにもちぎれたる具足を著。錆びたる長刀
 を持ち。瘦せたる馬を自身控へたる武者一騎あるべし。急いで此方へ来れと申し候へ。ツレ「畏つ
 て候。いかに誰かある。狂言「御前に候。ツレ」君よりの御説には。諸軍勢の中に。ちぎれたる具
 足を著。さびたる長刀を持ち。瘦せたる馬を自身ひかへたる武者あるべし。急いで尋ねて御前へ参
 れとの御事にて候。狂言「畏つて候。いかに申し候。シテ」何事にて候ぞ。狂言「上意にて候(此句今は)。
 急いで御前へ御参り候へ。シテ」何と某に御前へ参れと候や。狂言「なかなかのこと。シテ」あら思
 ひよらすや。これは(三字今は「定めて人違」)にて候べし。狂言「いやいや其方の事にて候。其仔細は諸
 軍勢の中に。いかにも見苦しき武者を連れて参れとの上意(二字今は「御」)にて候が。見申せば其方ほど
 見苦しき武者も候はぬほどに。倍申し候。急いで御参り候へ。シテ」何とたとへば諸軍勢の中に。
 いかにも見苦しき武者に参れと候や。狂言「なかなかのこと。シテ」さては某が事にて候べし。畏
 つたると御申し候へ。狂言「心得申し候。

シテげにげにこれも心得たり。某が敵人謀叛人と申し上げ。御前に召し出だされ頭を刎れられんためな。よしよしそれも力なし。いでいで御前に参らんと。大床さして見渡せば。地、今度の早打に。今度の早打に。上り集まる兵。輝星の如く並み居たり。諸御前には諸侍。其外數人並み居つ。目を引き指をさし笑ひあへる其中に。シテ「横縫のちぎれたる。地、古腹巻に錆長刀。やうやうに横たへ。悪びれたる氣色もなく。参りて御前に畏る。

ワキ、調「やあいかにあれなるは佐野の源左衛門(今は此間に「の」の字)常世か。これこそいつぞやの大雪に宿借りし修行者よ見忘れてあるか。いで汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるならば。ちぎれたりとも其具足取つて投げ懸け。さびたりとも其長刀を持ち。瘦せたりともあの馬に乗り。一番に馳せ参るべきよし申しつる。言葉の末を違へずして。参りたるこそ神妙なれ。まづまづ今度の勢つかひ全く餘の儀にあらず。常世が詞の末。眞が偽か知らんためなり。又常世の人人も。訴訟あらば申すべし。理非によつて其沙汰致すべき處なり。まづまづ沙汰のはじめには。常世が本領佐野の庄。三十余郷返し與ふる處なり。又何よりも切なりしは。大雪降つて寒かりし

に。秘藏せし鉢の木を切り。火に焚きあてし志をば。いつの世にかは忘るべき。いで其時の鉢の木は。梅櫻松にてありしよな。其返報に加賀に梅田。越中に櫻井。上野に松井田。合せて三ヶの庄。子孫孫に至るまで。相違あらざる自筆の狀。安堵に取りそへ賜ひければ。シテ常世はこれを賜はりて。地「常世はこれを賜はりて。三度頂戴仕り。これ見給へや人人よ。はじめ笑ひし輩も。これほどの御氣色(三字今は各流「ギキョウ」の語あり「ケシキ」と)さぞ羨ましからん。地「さて國國の諸軍勢。皆御暇賜はり古里へとてぞ歸りける。シテ「其中に常世は。地「其中に常世は。悦の眉を開きつ。今こそ勇め此馬に。うち乗りて上野や。佐野の船橋取り放れし。本領に安堵して。歸るぞ嬉しかりける。歸るぞ嬉しかりける。

百三 羽衣

ワキ 天人
シテ 伯良
ワキツレ 漁夫

ワキ(伯良)「風早の。三保の浦曲を漕ぐ船の。浦人騒ぐ波路かな。これは三保の松原に。伯良と申す漁夫にて候。萬里の好山に雲忽ちに起り(一切原詩は「千里の好山に雲忽ちをさまり」とあり。「忽ちに起り」といひては意味次第に續かされは云ふまでもなく誤なり。もと原詩のまゝなりし

心をなき旅樂師の改(いららうめいげつありはじ
めたるなるべし)一樓の明月に雨始めて晴る(今晴れつと語へども。此の如き語の事ことよし。之げに長閑なる時し
もや。春の氣色松原の。波立ちつづく朝霞。月も殘の天の原。及びなき身の暁にも。心空なる
氣色かな。忘れめや山路をわけて清見海。遙に三保の松原に。立ちつれいざや通はん。立ちつれ
いざや通はん。風むかふ。雲の浮波たつと見て。雲の浮波たつと見て。釣せて人や歸らん。ま
てしばし春ならば。吹くものどけき朝風の。松は常磐の聲ぞかし。波は音なき朝和に。釣人多き
小舟かな。釣人多き小舟かな。聞われ三保の松原に上り。浦の氣色を眺むるところに。虚空に
花降り音楽聞え。靈香四方に薫す。これ唯事と思はぬところに。これなる松に美しき衣掛れ
り。寄りて見れば色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて歸り古き人にも見せ。家の寶とな
さばやと存じ候。

シテ(天人)のう其衣は此方にて候。何しにめされ候ぞ。ワキ「これは拾ひたる衣にて候ほどに取
りて歸り候よ。シテ「それは天人の羽衣とて。容易く人間に興ふべきものにあらず。もとの如くに
置き給へ。ワキ「その此衣の御主とは。さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特に

留め置き。國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。シテ「悲しやな羽衣なくて飛行の道
も絶え。天上に歸らんことも適ふまじ。さりとは返したび給へ。ワキ「此御詞を聞くより
も。いよいよ伯良力を得。聞もとより此身は心なき。天の羽衣とりかくし。適ふまじと
て立ち退けば。シテ「今はさながら天人も。羽なき鳥の如くにて。上らんとすれば衣なし。ワキ「地
に又住めば下界なり。シテ「とやあらんかくやあらんと悲めど。ワキ「伯良衣を返されば。シテ「力
及ばず。ワキ「せん方も。地泪の露の玉葛。かざしの花もしほしほと。天人の五衰も。目の前に見
えて淺ましや。シテ「天の原ふりさけ見れば霞立つ。雲路惑ひて行くへ知らずも。地「住み馴れし空
にいつしか行く雲の羨ましき氣色かな。迦陵頻伽の馴れ馴れし。迦陵頻伽の馴れ馴れし。聲
今更に僅なる雁の歸り行く。天路を聞けば懐かしや。千鳥鷗の沖つ浪。行くか歸るか春風の。
空に吹くまで懐かしや。空に吹くまで懐かしや。ワキ「聞「いかに申し候。御姿を見奉れば。餘
りに御痛はしく候ほどに。衣を返し申さうするにて候。シテ「あら嬉しや此方へ賜はり候へ。
ワキ「暫候(一字今は)承り及びたる天人の舞樂。唯今「こにて奏し給は。衣を返し申すべし。

シテ嬉しやさては天上に歸らんことを得たり。此悦にとてもさらば。人間の御遊の形見の舞。月宮を廻らす舞曲あり。唯今こゝにて奏しつゝ。世のうき人に傳ふべしさりながら。衣なくては適ふまじ。さりとはまづ返し給へ。ワキ「いや此衣を返しなば。舞曲をなさで其まゝに。天にや上り給ふべき。シテ「いや疑は人間にあり。天に偽なきものを。ワキ「あは恥かしやさらばとて。羽衣を返し與ふれば。シテ「少女は衣を著しつゝ。霓裳羽衣の曲をなし。ワキ「天の羽衣風に和し。シテ「雨に潤ふ花の袖。ワキ「一曲を奏で。シテ「舞ふとかや。地「東遊の駿河舞。東遊の駿河舞。此時や始めなるらん。

地「舞それ久方の天と云つば。二神出世の古。十方世界を定めしに。空は限りもなければとて。久堅の空とは名づけたり。シテ「然るに月宮殿の有様。玉斧の修理とこしなへにして。地「白衣黒衣の天人の。敷を三五に分つて。一月夜夜の天少女。奉仕を定め役をなす。シテ「われも敷ある天少女。地「月の桂の身をわけて假に東の駿河舞。世に傳へたる曲とかや。春霞たなびきにけり久方の。月の桂の花や咲く。げに花かづら色めくは春のしるしかや。面白や天ならで。こゝも妙な

り天つ風。雲の通路吹きとちよ。少女の姿しげし留まりて。此松原の。春の色を三保が崎月清見富士の雪。いづれや春の曙。たぐひ波も松風も。長閑なる浦の有様。其上天地は。何を隔てん玉垣の。内外の神の御末にて。月も曇らぬ日の本や。シテ「君が代は。天の羽衣まれに來て。地「撫づとも盡きぬ巖ぞと。聞くも妙なり東歌。聲添へて敷敷の。笙笛琴箏篋。孤雲の外に充ち充ちて。落日のくれなゐは。蘇命路の山をうつして。縁は波に浮島が。拂ふ嵐に花ふりて。げに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。シテ「南無歸命月天子。本地大勢至。地「東遊の舞の曲。(序ノ舞)シテ「あるひは。天つ御空の緑の衣。地「又は春立つ霞の衣。シテ「色香も妙なり、少女の裳裾。地「さゆふさ。さゆふ颯颯の。花をかざしの天の羽袖。靡くも返すも舞の袖。(舞ノ舞)東遊の敷敷に。東遊の敷敷に。其名も月の宮人(二字各流とも今は「イロビト」と云ふ。法は附れなきことなり。事蹟誤り來れるなり。之を蘇命の「三五夜中新月色の詩句より出でたる)は。三五夜中の空に又満月(養生法にては今「ヤングラン」といへるにて「月」字なること論)の姿なりと主張せり。之は満月の形を円満なる時に引きて其如の形)真如の影となり。御願圓滿国土成就。七寶充滿の寶を降らし。国土に、れを施し給ふ。さる程に時移つて。天の羽衣

浦風にたなびきたなびく三保の松原。浮島が雲の愛鷹山や富士の高嶺幽になりて。天つ御空の霞に紛れて失せにけり。

百四 道成寺

ワキ 白拍子の実(前は白拍子、後は蛇妖) 道成寺住僧
ワキ 道成寺住僧
ワキ 龍力二人

ワキ(道成寺住僧) 詞「これは紀州道成寺の住僧にて候。さても當寺に於いてさる仔細あつて。久しく撞鐘退轉仕りて候を。此程再興し鐘を鑄させて候。今日吉日にて候ほどに。鐘の供養を致さばやと存じ候。いかに能力。はや鐘をば鐘樓へ上げてあるか。ヲカシ(龍力二人)さん候はや鐘樓へ上げて候御覽候へ。ワキ 今日鐘の供養を致さうするにてあるぞ。又さる仔細あるあひだ。女人禁制にてあるぞ。かまひて一人も入れ候な。其分心得候へ。狂言畏つて候。

シテ(白拍子) 詞「作りし罪も消えぬべし。作りし罪も消えぬべし。鐘の供養に参らん。これは此國の傍に住む白拍子にて候。詞「さても道成寺と申す御寺に。鐘の供養の御入り候よし申し候ほどに。唯今参らばやと思ひ候。月は程なく入汐の。月は程なく入汐の。煙滿ち來る小松原。

急ぐ心かまた暮れぬ。日高の寺に著きにけり。日高の寺に著きにけり。詞「急ぎ候ほどに。日高の寺に著きて候。やがて供養を拜まうするにて候。(狂言シカク) シテ「これは此國の傍に住む白拍子にて候。鐘の供養にそと舞を舞ひ候べし。供養を拜まさせてたまはり候へ。(狂言シカク) シテ「あら嬉しや涯分舞を舞ひ候べし。嬉しやさらば舞はんとして。あれにまします宮人の。烏帽子をしばしかり著て。詞「すでに拍子を進めけり。花の外には松ばかり。花の外には松ばかり暮れそめて。鐘や響くらん。道成の卿承り。始めて伽藍橋の。道成興業の寺なればとて。道成寺とは名づけたりや。地「山寺のや。シテ「春の夕暮來て見れば。地「入相の鐘に花ぞ散りける。入相の鐘に花ぞ散りける。花ぞ散りける。シテ「さるほどにさるほどに。寺の鐘。地「月落ち鳥鳴いて霜雪天に。満潮程なく日高の寺の。江村の漁火愁に對して。人人眠ればよき隙ぞと。立ち舞ふ様にてれらひよりて。撞かんとせしが。思へば此鐘怨めしやとて。龍頭に手を掛け飛ぶとぞ見えし。引きかづきてぞ失せにける。(狂言シカク)

ワキ、詞「言語道断かやうの儀を存じてこそ。固く女人禁制の由申して候に。曲事にてあるぞ。の

うのう皆皆かう渡り候へ。此鐘に就きて女人禁制と申しつる謂の候を御存じ候か。ワキツレ(後世)「いや何とも存ぜず候。ワキ」さらば其いはれを語つて聞かせ申し候べし。ツレ「ねんころに御物語り候へ。

ワキ、詞「昔此所に。まなこの庄司と云ふ者あり。かの者一人の息女を持つ。また其頃奥より熊野へ年詣する山伏のありしが。庄司が許を宿坊と定め。いつも彼の所に來りぬ。庄司娘を寵愛のあまりに。あの客僧こそ汝かつまよ夫よなどと戯れした。幼心に眞と思ひ年月を送る。又ある時かの客僧庄司が許に來りしに。彼の女夜更け人静まつて後。客僧の園に行き。いつまで妾をばかくて置き給ふぞ。急ぎ迎へ給へと申ししかば。客僧大きに騒ぎ。さあらぬ由にもてなし。夜に紛れ忍び出でて此寺に來り。平に頼むよし申ししかば。隠すべき所なければ。撞鐘をおろし其内に此客僧を隠し置く。さて彼の女は山伏を遁すまじとて追つかくる。なりふし日高川の水以つての外に増りしかば。川の上下を彼方此方へ走りまはりしが。一念の毒蛇となつて。川を易易と泳ぎ越し此寺に來り。こゝかしこを尋ねしが。鐘の下りたるをあやしめ。龍頭

なくはへ七まとひ纏ひ。焔を出だし尾を以つてたしげば。鐘は即ち湯となつて。終に山伏をとり畢んぬ。なんぼう恐ろしき物語にて候ぞ。ツレ「言語道斷。かゝる恐ろしき御物語こそ候はれ。ワキ「其時の女の執心残つて。又此鐘に障礙をなすと存じ候。われ人の行功も。かやうの爲にてこそ候へ。涯分祈つて此鐘を二度鐘樓へ上げうするにて候。ツレ「尤然るべう候。

ワキ、語「水かへつて日高川原の眞砂の数は盡くるとも。行者の法力盡くべきかと。ツレ「昔一同に聲を上げ。ワキ「東方に降三世明王。ツレ「南方に軍荼利夜叉明王。ワキ「西方に大威德明王。ツレ「北方に金剛夜叉明王。ワキ「中央に大日大聖不動。地「動くか動かぬかさつくの。眞説三曼陀羅日羅南。旋多摩訶囉遮那。娑婆多那畔多囉吒干竺。聽我説者得大智惠。知我心者即身成佛と。今の蛇身を祈る上げ。ワキ「何の怨か有明の。撞鐘こそ。地「すばすば動くぞ祈れただ。すばすば動くぞ祈れただ。引けや手に手に千手の陀羅尼。不動の慈救の偈。明王の火焰の。黒烟を立ててぞ祈りける。祈り祈らせ撞かれど此鐘響き出で。引かれど此鐘躍るとぞ見えし。程なく鐘樓に引き上げたり。あれ見よ蛇體は顯れたり。地「謹請東方青龍清淨。謹請

さいはうびやくたいはくりうきんせいちうくわうたいくわうりういちだいなせんせんだいせんせいかい
 西方白體白龍。謹請中央黃體黃龍。一大三千大千世界の。恒沙の龍王哀愍納受。
 哀愍自謹のみぎんなれば。いづくに大蛇のあるべきぞと。祈り祈られかつげと轉ぶが。又起きあが
 つて。忽に。鐘に向つてつく息は。猛火となつて其の身を焼く。日高の川波深淵に。飛んで
 ぞ入りにける。望足りぬと驗者たちは。わが本坊にぞ歸りける。わが本坊にぞ歸りける。

百五 龍 虎

ワキ(旅僧) 龍(前は樵夫) ツレ 龍(前は樵夫)

ワキ(旅僧) 龍(前は樵夫) ツレ 龍(前は樵夫)
 のりみち 法の道にと思ひ立つ。法の道にと思ひ立つ。浪路遙けき船路かな。國これ諸國一見
 の僧にて候。われ若年の時よりも。諸國修行の志あるにより。日の本をば残らず見廻りて
 候。又承り及びたる佛法流布の跡を尋ね入唐渡天の望あつて。此間は九州博多の津に候
 處に。よき便船の候あひだ。此春思ひ立ち渡唐仕り候。道行、天の原八十島かけて漕ぎ出
 づる。八十島かけて漕ぎ出づる。船路の末も不知火の。筑紫をあとになしはてて。行くへにつづく
 雲の波。霞を分くる海原に。又山見えて程もなく。はや唐土に著きにけり。はやもろこしに著き
 にけり。

ワキ、調「あら嬉しや候。遙遙と思ひしに。佛神の御加護もやありけん。行進安穩に布帆恙も
 なく渡唐仕りて候。心靜に所所を一見せばやと存じ候。げにや虹霞浦を隔てて人煙遠し。
 巨水天に連なつて雁點遙なり。眺めやる遠山もとの群竹の。霞こめたる面白さよ。又これな
 る岨傳を山人の來り候。此者を待ち名所をも尋ねばやと存じ候。
 シテ(樵夫) ツレ(樵夫) 龍(前は樵夫) ツレ 龍(前は樵夫)
 をりをえて。春の薪にさす花の。にはひを運ぶ山風。ツレ「谷の下庵遙遙と。
 シテ、ツレ二人「霞に遠き眺かな。シテ「五嶺蒼蒼として雲往來す。但憐む大腹万株の梅。
 シテ、ツレ二人「梢も殊に色深き。木陰によれば心なき身にもあはれば有明の。つれなき命ながら
 へて。又廻りあふ春邊かな。真に知んぬ。老も風情少なき有様を。見る度に變る姿やます鏡。
 變る姿やます鏡。うつる月日は程もなく。昨日は少年。けふ白頭の雪とのみ積り積りて老が身
 の。春の光にあたれども。わびしき業を柴取りて。歸る山路の苦しきよ。かへる山路のくるし
 きよ。

ワキ、調「いかにこれなる山人に尋ね申すべき事の候。シテ不思議やな見馴れ申さぬ御姿なり。いかさまこれに入唐の沙門にて御座候な。ワキげによく御覧じて候ものかな。われ日の本より此國に渡り。佛法流布の古跡を尋ね。これより渡天のころさしあるにより。遙遙思ひ立ちて候。シテさては渡天の御ためかや。昔は聞きつ近き世には。ありがたかりける御事かな。ツレ、驚げに痛はしや遙遙と。行くへも遠き旅衣の。シテ、調「立ち出で給ひし日の本の。佛法東漸をふり捨てて。ワキ、驚「さりにし法の跡遠き。シテ、昔語を今さらに。ワキ、誰かくはしく。シテ、夕月夜。地、星の國にと行く雲の。星の國にと行く雲の。はてしはあらじ人心。心せよ胸の月。餘所の光を尋ねても。何にかばせん眼のあたり。見るを尋ねるはかなさよ。見るを尋ねるはかなさよ。ワキ、調「かかる面白き御答こそ候はれ。まづまづ尋ね申したき事の候。見え渡りたる山河の気色。何れも妙なる眺のうちに。あれに霞める遠山もとの。向に見えたる竹林に。俄に雲のうち掩ひ。風冷ましく吹き落ちて。さながら氣疎きその気色。これはいかなる事やらん。シテ、驚げに御不審は御理。あの竹林の岩洞は虎の栖にて候を。向に見えたる高山より。常常雲の掩ひつ。龍虎の戦あ

るものを。ワキ、驚「不思議の事を聞くものかな。音に聞きしを眼のあたり。龍虎の争ふ其の有様を。今見る事の不思議さよ。シテ、調「畜類なれどもかくの如く。其勢をあらはして。ワキ、驚「何かさのみ。シテ、争の。地、蝸牛の角の上にして。はかなや何事を。争は人の身もかはらぬものを。世の中の習なればや。畜類の戦ふ事もことわりや。戦ふ事もことわりや。ワキ、調「猶猶龍虎の戦の有様委しく御物語り候へ。地、それ生を受くるもの。其身の威勢を争ふこと。人間以つてこれに同じ。必ず龍虎に限るべからず。シテ、然れば金龍雲を穿ち。猛虎深山に風を起す。地、何れも勢妙にして。互の勢を争ふこと。畜類といへども位高く。雲居に住めば龍虎の紋。シテ、帝の御衣にもこれを織り。地、殊に天子の御顔を龍顔と申し。御乗物を龍駕とも又名づけたり。さて又虎ばかりそめに。住むも千里の道しめて。すみかと定むとか。もとより竹は直にして。月(一字昔より「ウチ」と詠ひ習はせり。「月」の草林を「内」の清きをわが友と。頼む千尋の影清く。曇らぬ法の道を知る。羅漢に仕へ奉る。又は四瑞の一つにも。あらはれけると聞くものを。龍吟すれば雲起り。虎嘯けば風生すと。聞きしもまのあたり見るこそ不思議なりけれ。

シテ、これぞ和國の物語。地くはしく猶も見給はば。此山陰の岨傳。竹の林の此方なる。巖の陰に立ち寄りて。身を隠し見給へど。夕日も傾きぬ。暇申さんと結ふ柴の。薪を肩にうちかけて。谷の下道遙遙と。家路をさしてくだりけり。家路をさしてくだりけり。(中人)
 ワキ、謡「さて不思議や山人の。教のまゝに山路を分け。竹林を遙に見渡せば。煙葉朦朧として夜の色を侵す。風枝蕭颯として秋の聲より冷まじや。地「あれあれ嶺より雲起り。あれあれ嶺より雲起り。俄に降りくる雨の音。鳴神稻妻天地に耀く光のうちに。現れ出づる金龍の勢。遙によそ目も肝を消し。身の毛もよだつばかりなり。地「かくて黒雲竹林に覆ひ。かくて黒雲竹林に覆ひ。覆ひかゝると見えつるが。竹林の岩洞に籠れる虎の現れ出づれば。岩屋うちより悪風を吹き出だし。一方に雲を吹き返し。敵を追風に勢勇む。恐しかりける氣色かな。地「かかりける所に。かかりけるところに。金龍雲より下り降つて。悪虎を取らんと飛んてかゝり。飛龍の戦隙もなし。(舞)シテ「もとより虎亂の勢猛く。地「もとより虎亂の勢猛く。左も右も。劍の如くに竹枝を折つて。金龍にかゝれば。悪虎を巻かんと覆ひかゝる

を。背けて追つめ喰はんとすれば。金龍雲居に遙に上れば。悪虎はいきほひ巖に上り。遙に見送り無念の勢あたりを拂ひ。又竹林に飛びかへり。又竹林に飛び歸つて。其まゝ岩洞に入りにつけり。

百六 蘆 刈

ワキ 從 日下左衛門 狂言 里人

ワキ(從者)「古き都の道なれや。古き都の道なれや。難波の浦を尋ねん。地「かやうに候者は。都さる御方に仕へ申す者にて候。又これに御座候御事は。頼み奉り候人の若子の御乳の人にて御座候。御里は津の國の日下の里にて候が。今一度御下りありたき由仰せ候ほどに。此度われら御供申し。淀より舟に乗せ申し。唯今難波の里(今親世流にては)へと急ぎ候。道行、淀舟や。水野の原の曙に。水野の原の曙に。影も残りて有明の。山本霞む水無瀬川。渚の森をよそに見て。なほ行末も「二字今は「は」と謡ふ。渡邊や。大江の岸も「二字恐らく「に」に移りゆく。波も「二字或は」入江の里續く。難波の浦に著きにけり。難波の浦に著きにけり。

御急ぎ候ほどに。これははや津の國日下の里に御着きて候。これに暫御待ち候へ。日下の左衛門殿を尋ね申さうするにて候。此あたりの人の渡り候か。狂言もとは此所に御座候ひしが。さんざん御無あたりに日下の左衛門殿と申す人の渡り候か。狂言もとは此所に御座候ひしが。さんざん御無力にて今は此所には御座なく候。ワキ「あら何ともなや候。此由をやがて申さうするにて候。いかに申し候。左衛門殿を尋ね申して候へば。今は此處に御座なき由申し候。ツレ(日下左衛門)「誰にや家賃にしては親知少なく。賤しき身には故人疎しとかや申すなれば。身には限らぬ習なれども。餘りに淺ましき有様かな。阿「さりながら様様契り置きし事あり。此所に暫逗留し。かの人の行くへを尋ねばやと思ひ候。ワキ「げにげに仰もつともにて候。此所に暫く御逗留候へ。猶猶御行くへを委しく尋ね申さうするにて候。いかに以前の人のわたり候か。此浦にいか様(阿)なる面白き事は候はぬか。都の人に見せ申したく候。狂言「さん候。此浦に濱市の候。いろいろの物を賣り買ひ候なかに。若き男の此難波の蘆を刈りて賣り候が。いろいろに戯れ事を申して面白きものにて候あひだ。名草の事にて候ほどに皆皆買ひ取り候。暫く御待ち候ひてか

の者を御覽候へ。ワキ「あら嬉しや候。さらばかの者を待つて見うするにて候。シテ(日下左衛門)「足曳の山こそ霞め難波江に。向ふは波の淡路瀉。げにや所から異浦浦の氣色までも。眺につく難波舟の。出で浮みたる朝ぼらけ。心も澄める面白さよ。難波なる。見つとはいはじかゝる身に。地「われたに知らぬ面忘れ。シテ「立ち舞ふ市のなかなかに。地「隠れ所はあるものを。シテ「げに受けがたき人界を。たまたま受くる身なりせば。榮花の家には住みもせで。かゝる貧家に生るゝこと。前の世の戒行こそ拙けれ。今とてもなす業もなき身の行くへ。きのふと過ぎ今日と暮れ。あす又かくこそ荒磯海の。濱の眞砂の敷ならぬ。此身命を繼がんとて。あだなる露の草の葉に。蘆刈人となりたるなり。地「何とかならん難波江の。浦に出で里に雪の寒き日をも厭はず。潮垂るゝ。わが身の濁はつれなくて。わが身の濁はつれなくて。異浦見れば夕煙。怨めしや終に身を。立てかれてこそ賤しけれ。あしたづの。雲居のよそにながめこし。月の下蘆刈り持ちて。露をも運ぶ袖の上。猶ありがほの心かな。猶ありがほの心かな。ワキ、阿「いかにこれなる人に申すべき事の候。シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ「見申せば

色色の物を賣り候中に。難波の蘆を御賣り候こそ優しうこそ候へ。シテ、さん候此あたりにては
 賣る者も買ふ人も。唯何となくあつかふところに。都の人とて難波の蘆を御賞翫こそ。返す
 返すも優しけれ。難波も昔は難波津の。名に負ふ古き都人の、ゆかりの露の落ちぶれたる。
 身は枯蘆の色なくとも。よしとて召され候へ。ワキ、雨、あら面白や候。さて茶と蘆とは同じ草に
 て候か。シテ、さん候譬へば薄ともいひ。穂に出でぬれば尾花ともいへるが如し。ワキ、難波は
 物の名も所によりてかはるよのう。シテ、雨、なかなかの事此蘆を。伊勢人は濱萩といひ。
 ワキ、難波人は。シテ、蘆といふ。地、むつかしや。難波の浦のよしあしも。難波の浦のよしあし
 も。賤しき海士ばえて知らぬ。唯世を渡るためなれば。假の命を綱がんとて。蘆を取り運びて
 此市に出づる足敷に。おあし添へて召されよや。おあし添へて召されよ。つゆながら難波の蘆を
 刈り持ちて。夜は月をも運ぶなりや。暇をし。夕汐の晝の内に召されよや。晝のうちに召され
 よ。
 ワキ、雨、いかに申し候。さて御津の濱とはいづくにて候ぞ。シテ、かたじけなくも御津の濱の御在所

はあれにて候。ワキ、不思議や何とて。忝きなどとは仰せ候ぞ。シテ、あら何ともなや。さらば何
 とて御津の濱とは御尋ね候ぞ。忝くも仁徳天皇。此難波の浦に大宮造し給ふ。御津と書いて
 御津の濱とは申すなり。ワキ、難波に面白きいはれかな。皇居なりつる浦なれば。御津の濱と
 は道理なり。シテ、雨、波濤海邊の大宮なれば。漁村に燈す篝火までも。禁裏雲居の御火かと思
 えて。上雲上の月卿より。下萬民の民間(五子城)までも。ありがたかりし惠ぞかし。や。あれ
 御覽ぜよ御津の濱に。網子調ふる網船の。えいやえいやと寄せ來るぞや。池、名にし負ふ難波津
 の。名にし負ふ難波津の。歌にも。大宮の内まで聞ゆ網引すと。網子調ふる海士の呼び聲と詠み置
 ける。古歌をも引く網の。目の前に見えたる有様。あれ御覽ぜよや人人。シテ、面白や心あら
 ん。池、面白や心あらん。人に見せばや津の國の。難波わたりの春の氣色。腕舟漕がれ來る。
 沖の鷗磯千鳥。連れ立ちて友呼ぶや。海士の小舟なるらん。シテ、雨に著る。池、雨に著る。田蓑
 の鳥もあるなれば。露も眞菅の笠はなどか無からん。
 地、難波津の春なれや。シテ、名にし負ふ梅の花笠。池、縫ふてふ鳥の翼には。シテ、鷗も有明

の。地「月の笠に袖さすは。シテ」天つ少女の衣笠。地「それは少女。シテ」これは又。地「難波女の
 難波女の。かづく袖笠ひぢ笠の。雨のあしべも亂るゝかたを波(四字「和歌の浦に波浦ちくれは潮を無み海邊をさして
 字を充つるは多なりといふ説あり。これはほしき偏見にて、これは此歌三句を探り「無み」乃音により「波」にかけて「あなたへさ」あなたへざらり
 らり」と讀けたるなり。故に特に「波」の字を充つ。但し「片男波」といふ波のやうに思ふ人あるは誤なり。かかると古來これなし。)あなたへざらり
 こなたへざらり。ざらりざらりざらざらざつと。風の上けたる古藤(ふるすだれ
 つれづれもなき心おもし
 るや。

ツレ、隠いかに誰かある。ワキ「御前に候。ツレ」あの蘆賣る人に。其蘆一本持ちて來れと申し候
 へ。ワキ「畏つて候。いかに申し候。あの御輿の内へ。其蘆一本持ちて御参りあれと仰せ候。
 シテ」畏つて候。さらば此蘆を参らせられ候へ。ワキ「いや唯直に参らせられ候へ。シテ」畏つて
 候(今は此シテの
 候一句を脱す。)

ワキ「あら不思議や。今の蘆賣る男の御姿を見参らせ。これなる所へ隠れて候は。何と申したる
 御事にて候ぞ。ツレ」今は何をかつみ参らせ候へき、唯今の蘆賣る人は。わらはがいにしへ人
 にて候。隠「これは夢かやあらあさましや候。ワキ」言語道斷の御事。さらに苦しからぬ事にて

候。某「やがて参り御供申し候べし。御心易くおぼしめされ候へ。ツレ」いや暫。皆皆御出
 であらば。定めて恥ぢ参らせられ候べし。わらは密に行き斯くと申さばやと思ひ候。ワキ「げにこ
 れは尤にて候。さらば御出であらうするにて候。

ツレ、隠いかにいにしへ人。わらはこそこれまで参りて候へ。行末かけし玉の緒の。結ぶ契のか
 ひありて。今は世にある様なれば。遙遙尋ね参りたるに。何處へ忍ばせ給ふらん。とくとく出で
 させ給ひ候へ。シテ「これは唯夢にぞあるらん現ならば。よその人目もいかならんと。思ひ沈め
 るばかりなり。ツレ」かくは思へど若しは又。人の心は白露の。置き別れにしきぬぎぬの。妻や重
 れし難波人。シテ、同「蘆火焚く屋は煤たれて。おのが妻衣それならで。又は誰にか馴れ衣。隠「君な
 くてあしかりけりと思ふにぞ。いと難波の浦は住み憂き。ツレ」あしからじ。善からんとてぞ別
 れにし。何か難波の浦は住み憂き。シテ「げにや難波津淺香山の。道は夫婦の媒なれば。地「さの
 みは何なかつみ井の。隠れて住める小屋の戸を。押しあけて出でながら。面なのわが姿や。三
 年の過ぎしは夢なれや。現に逢ふの松原かや。木蔭に圓居して。難波の昔語らん。ワキ、同「か

かるめでたき御事こそ候はれ。やがて都へ御供あらうするにて候。まづまづ烏帽子直垂を召され候へ。やがて御盃を参らせうするにて候。餘りにめでたき折にて候ほどに。某お酌に参らうするにて候。(今は各流とち「やがて」以下の句を讀はず)

地、高き山深き海。妹背戀路の跡ながら。ことに難波の海山の。所からなる情とかや。シテあるは男山の昔を思ひ出でて。地、女郎花の一時をくれるといへども。云ひ慰むる言の葉の。露もたわに秋萩の。もとの契の消えかへり。つれなかりける命かな。シテ「さればかほどに衰へて。地、身をほづかしの森なれども。言葉の花こそたよりなれ。難波津に。咲くや木の花冬籠り。今は春べと咲くや木の花と榮え給ひける。仁徳天皇と聞えさせ給ひしは。難波の皇子の御事。又淺香山の言の葉は。采女の盃取りあへぬ。怨を陳べし故とかや。此二歌は今までの。歌の父母なる故に。代代に普き花色の。言の葉草の種とりて。われら如きの手習ふ始なるべし。然れば目に見えぬ鬼神をも和らげ。武士の心慰むる。夫婦の情知る事も。今身の上知られたり。シテ「津の國の。難波の春は夢なれや。地、蘆の枯葉に風渡る。波のたちゐの隙とて

も。淺かるべしやわたつみの。濱の眞砂はよみ盡くし盡くすとも。此道は盡きせめや。唯もてあそべ名にし負ふ。難波の怨うち忘れて。ありし契に歸りあふ、縁こそ嬉しかりけれ。ワキ、詞「いかに申し候。めでたう一さし御舞ひ候へ。シテ「さらばそと舞はうするにて候。今「怨も波の上。地、立ち舞ふ袖のかざしかな。(男舞) 浮寝忘る、難波江の。浮寝忘る、難波江の。蘆の若葉をこゆる白波。月も残り花も盛に津の國の。こやの住まひの冬籠。今は春べと都の空に。伴ひ行くや大伴の。御津の浦曲の見つゝを契に。歸る事こそ嬉しけれ。

百七 敦 盛

ワキ 平敦盛(前は京別当) 前ツレ 其別当

ワキ(放生法師)「夢の世なれば驚きて。夢の世なれば驚きて。捨つるや現なるらん。詞「これは武藏の國の住人。熊谷の次郎直實出家し。蓮生と申す法師にて候。さても敦盛を手に懸け申ししこと。餘りに御痛はしく候ほどに。かやうの妻となりて候。又これより一の谷に下り。敦盛の御菩提を弔ひ申さばやと思ひ候。進行、九重の雲居を出でて行く月の。雲居を出でて行く

月の南に廻る小車の。淀山崎をうち過ぎて。昆陽の池水生田川。波こもともや須磨の浦。一の谷にも著きにけり。一の谷にも著きにけり。河急ぎ候ほどに。津の國一の谷に著きて候。眞に昔の有様今のやうに思ひ出でられて候。又あの上野に當つて笛の音の聞え候。此人を相待ち。此あたりの事どもくばしく尋ねばやと思ひ候。

シテ(草刈男、ツレ)草刈笛の聲添へて。草刈笛の聲添へて。吹くこそ野風なりけれ。シテかの岡に草刈るをのこ野を分けて。歸るさになる夕まぐれ。シテ、ツレ、家路もさぞな須磨の海。すこしが程の通路に。山に入り浦に出づる。うき身の業こそ物うけれ。問はこそ獨りわぶとも答へまじ。須磨の浦。藻鹽誰とも知られなば。鹽藻誰とも知られなば。われにも友のあるべきに。餘りになれば佗人の。親しきだにも疎くして。住めばとばかり思ふにぞ。うきに任せて過すなり。うきに任せて過すなり。

ワキ、圓いかにこれなる草刈たちに尋ね申すべき事の候。シテ、此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ、唯今の笛はかたがたの中に吹き給ひて候か。シテ、さん候、我らが中に吹きて候。ワキ、あら優

しや。其身にも應ぜぬ業。返す返すも優しうこそ候へ。シテ、其身にも應ぜぬ業と承れども。それ勝るなも羨まされ。劣るなも賤むなどこそ見えて候へ。其上樵歌牧笛とて。シテ、ツレ、草刈の笛木樵の歌は。歌人の詠にも作り置かれて。世に聞えたる笛竹の。不審な爲させ給ひそとよ。ワキ、げにげにこれは道理なり。さてさて樵歌牧笛とは。シテ、草刈の笛。ワキ、木こりの歌の。シテ、浮世を渡る一ふしを。ワキ、諸ふも。シテ、舞ふも。ワキ、吹くも。シテ、遊ぶも。地身の業の。好ける心により竹の。好ける心により竹の。小枝蟬折様様に。笛の名は多けれども。草刈の吹く笛ならば。これも名は青葉の笛と思し召せ。住吉の汀ならば高麗笛にやあるべき。これは須磨の鹽木の。海士の焚きさしと思し召せ。海士の焚きさしと思し召せ。ワキ、詞不思議な餘の草刈たちは皆皆歸り給ふに。御身一人留まり給ふこと。何の故にてあるやらん。シテ、何の故とか夕波の。聲を力に來りたり。十念授けおはしませ。ワキ、易き事十念をば授け申すべし。それにつけてもおことは誰ぞ。シテ、眞はわれは敦盛の。ゆかりの者にて候なり。ワキ、ゆかりと聞けばなつかしやと。掌を合せて南無阿彌陀佛。シテ、ワキ、二人、若我成佛十方

世界。念佛衆生。攝取不捨。地捨てさせ給ふなよ。一聲だにも足りぬべきに。毎日毎夜の御用ひ。あらありがたやわが名をば。申さすとても明暮に。向ひて廻向し給へる。其名はわれといひ捨て、姿も見えず失せにけり。姿も見えず失せにけり。(中入)

ワキ、驚「これにつけても申の。これにつけても申の。法事をなして夜もすがら。念佛申し教盛の。菩提を猶も申はん。菩提を猶も申はん。

後シテ(平教盛)「淡路潟通ふ千鳥の聲聞けば。寢覺も須磨の關守は誰ぞ。いかに蓮生。教盛こそ参りて候へ。ワキ「不思議やな覺鐘を鳴らし法事をなして。まどろむ隨もなき所に。教盛の來り給ふぞや。さては夢にてあるやらん。シテ、問「何しに夢にてあるべきぞ。現の因果を晴さん爲に。これまで現來りたり。ワキ、驚「うたてやな一念彌陀佛即滅無量の。罪障を晴さん稱名の。法事を絶えせず申ふ功力に。何の因果は荒磯海の。シテ、深き罪をも訪ひ浮め。ワキ「身は成佛の得脱の縁。シテ「これ又他生の功力なれば。ワキ「日ころは敵。シテ「今は又。ワキ「眞に法の。シテ「友なりけり。地「これかや。悪人の友を振り捨て。善人の敵を招けとは。御身の事があり

がたや。ありがたしありがたし。とても懺悔の物語。夜すがらいざや申さん。夜すがらいざや申さん。

地、驚「それ春の花の樹頭に上るは。上求菩提の機を勤め。秋の月の水底に沈むは。下化衆生の象を見す。シテ「然るに一門かどをならべ。累葉枝を連れしよそほひ。地「眞に種花一日の榮に同じ。善を勤むる教には。逢ふこと難き石の火の。光の間ぞと思はざりし。身の習はしこそはかなけれ。シテ「上にあつては下を惱まし。地「富んでは驕を知らざるなり。然かるに平家世を取つて二十餘年。眞に一昔の。過ぐるは夢のうちなれや。壽永の秋の葉の。四方の嵐に誘はれ。ちりちりになる一葉の。舟に浮き波に臥して。夢にだにも歸らず。籠鳥の雲を戀ひ。歸雁列を亂るなる。空定なき旅衣。日も重なりて年月の。立ち歸る春の頃。此一の谷に籠りて。暫しはこゝに須磨の浦。シテ「後の山風吹き落ちて。地「野もさえかへる海際に。舟の夜となく晝となき。千鳥の聲もわが袖も。波にしなる磯枕。海士の苦屋に共寢して。須磨人におのみ磯馴松の。立つるや夕煙。柴といふもの折り敷きて。思を須磨の山里の。かゝる所に住まひして。須磨人

になり果つる一門の果を悲しき。

シテ、詞「さては如月六日の夜にもなりしかば。親にて候經盛我らを集め。今様を誦ひ舞ひ遊びしに。ウキ、箏「さては其夜の御遊なりけり。城のうちにさも面白き笛の音の。寄手の陣まで聞えしは。シテ、詞「それこそさしも敦盛が。最期まで持ちし笛竹の。ウキ、箏「音も一節を誦ひ遊ぶ。シテ「今様朗詠。ウキ「聲聲に。地拍子を揃へ聲を上げ。(中ノ舞)シテ「さる程に。御舟を始め。地「一門皆皆船に浮れば。乗り後れじと汀にうち寄れば。御座舟も兵船も遙にのび給ふ。シテ「せん方波に駒を控へ。あきれはてたる有様なり。か、りけるところに。地「後より熊谷の次郎直實。遁さじと追つ懸けたり。敦盛も馬ひき返し。波の打物抜いて。二打三打は打つぞと見えしが。馬の上にて引つ組んで。波打ち際に落ち重なつて。終に討たれて失せし身の。因果は廻りあひたり。敵はこれぞと討たんとするに。寇をば恩にて。法師の念佛して用はるれば。終には共に生るべき。同じ蓮の蓮生法師。敵にてはなかりけり。跡用ひてたび給へ。跡用ひてたび給へ。

百八 木賊

ツレ二人 丑人 ウキ方子 旅人

ワキ(旅人)「信濃路遠き旅衣。信濃路遠き旅衣。日も遙遙の心かな。詞「これは都の者にて候。又これに渡り候御方は。本國は信濃の國の人にて御座候。未だ父を御持ち候が。今一度對面ありたきよし仰せられ候あひだ。われら御供申し。信濃の國へと急ぎ候。道行、道あるや。旅の關の戸明け暮れて。旅の關の戸明け暮れて。宿はいつくと定めなく。行くへも知らぬ身ながらも。伴ふ人は有明の。月日程なく木曾路經て。園原山に著きにけり。園原山に著きにけり。シテ(父、ツレ)二人、箏「木賊刈る。山の名までも園原や。伏屋の里も秋ぞ來る。ツレ「楢はいづれ一葉散る。シテ、ツレ「嵐や音を殘すらん。シテ「面白や處は鄙の住まひなれども。げに名所の故やらん。山野の詠も氣色立つ。シテ、ツレ「木曾の御坂の楢より。浮む雲間の朝づく日。園原山にうつろひて。木賊刈る野の青緑。草の秋も猶深し。小鹿鳴く野の行くへまで。妻や籠りし園原の。所は信濃路や。所は信濃路や。木曾の棧かゝる身の。うき世を渡る習はしに。さも馴れ衣鹽

たれて。袖の露もいとなし。草筵露を片敷く有明の。朝な朝な出づるや牧笛の野人ならまし。

地、刈るや木賊の言の葉は。いつれの詠なるらん。シテ木賊刈る。園原山の木の間より。磨か

れ出づる秋の夜の。月影をいざ刈らうよ。地影も假なる草の原。露分け衣しほたれて。刈れ

や刈れや花草。シテ木賊刈る木賊刈る。木曾の麻衣袖濡れて。磨かぬ露の玉ぞ散る。地散るや

霞のたまたまも。心の亂れ知るならば。シテ胸なる月は曇らじ。地げに真何よりも磨くべき

は。真如の玉ぞかし。思へば木賊のみか。われも亦木賊の。身を唯思へわが心。磨けや磨け身の

ためにも。木賊刈りて取らうよ。木賊刈りて取らうよ。

ワキ、問、いかにこれなる尉殿に尋ね申すべき事の候。シテ此方の事にて候か。何事にて候ぞ。ワキ見

申せば年だけ給ひたるが。手づから木賊を刈り持ち給ふこと。其身にも應ぜぬ業と見えて不審に

そ候へ。シテ其身にも應ぜぬ業と承れば人がましようこそ候へ。さりながら園原山の木賊は。名

所といひ名草といひ。歌人も御賞翫なれば。手づから刈り持ち土産と志し候。ワキげにげに

尤にて候。さて此所に伏屋の森と申す森の候か。シテさん候あれに見えたるこそ伏屋の森に

て候へ。ワキあの伏屋の森に箒木と申す木の候か。シテ御覽候へ楡に一木うすうすと見えたるこ

そ箒木にて候へ。箒草に似たる木にて候により。箒木と申し習はして候。これは宿木にて候。

ワキ古事の思ひ出でられて候。園原や伏屋に生ふる箒木の。問ありとは見えてあはぬ君かな

とよめり。何とてありとは見えてあはぬ君かなとは詠まれて候ぞ。シテ賤しき身にて候へば。其

心を何とて知り候べきなれども。所に申し習はしたる義を以つて。歌の心を推量申し候に。

あの箒木を此邊より見れば見え候が。木蔭に寄りては見え候はぬぞとよ。その心を歌人知りて。

ありとは見えて逢はぬ君かなと詠まれたる歌にて候やらん。ワキさて今も寄りては見え候はぬか。

シテなかなかのこと唯今其證據を見せ申さんと。ワキ、互に近づき立ち寄りて。シテ見ればあり

つる箒木の。ワキ蔭にて見ればかきたえて。シテ何れかそれぞ。ワキ不思議やな。地よそにて

は。正しく見えし箒木の。まさしく見えし箒木の。蔭に来て見ればなかりけり。げにも正しく。あ

りとは見えてあはぬ君かなと。詠み置く言の箒木は面白や。げにや道ある心とて。真なりける歌

人の。言葉の林繁るもや。其箒木の種ならん。其箒木の種ならん。
 シテ、御いかに御僧たちに申し候。われらが私宅は旦過にて候。一夜を明して御通り候へ。ワキ、あら
 嬉しやさらば参らうするにて候。ッレ、いかに御僧たち。御心安く御座候へ。今の尉殿は少し身
 に思の候ひて。時時は現なき風情の候。其時は心得あつて御あひしらひ候へ。ワキ、心得申
 して候。

シテ、いかに御僧たち。今夜は心静に尉が身の上を語つて聞かせ申し候へし。此尉は子を一人
 持ちて候を。行くへも知らぬ人に誘はれ。暮に失ひて候。もしも行くへや聞くと思ひ。此路次に
 居所を立て。往來の人を留め申し候。わが子の常は小歌曲舞に好きて。友を集め舞ひ誂ひ候ひし
 ほどに。此尉も時時は舞ひ誂ひ候。誰かある御盃を参らせ候へ。
 子(子方)御いかに申し候。唯今の尉殿はわれらが親にて候。ワキ、何唯今の尉殿は御親父にて御座
 候とや。さらば頼て御名のりあらうするにて候。キ、いや暫く。思ふ仔細の候へば。まづ知らぬよ
 もにて御入り候へ。ワキ、心得申し候。シテ、いかに御僧たちに申し候。餘りに夜永に候ほどに。酒

を持ちて参りて候。ワキ、御志はありがたけれども。飲酒は佛の戒にて候。シテ、飲酒は佛
 の御戒はさる事なれども。かの廬山の惠遠禪師。虎溪を去らぬ禁足にだに。陶淵明が志に
 て飲酒を破りしぞかし。ましてわが子の誂ひし。舞曲の酒宴の戯にて。老生を慰む
 志をば。などが憐み給はざらん。地、廬山の古を思しめさば。心の底までも涙みて知る。
 法の眞水と思しめして。飲酒の心とけて一つきこし召されよ。地、それ認つて仙家に入つて半
 日の客たりといへども。舊里に歸つて七世の孫に逢ふことをともいへり。シテ、況んや一世の親とし
 て。など其情なからざらん。地、ていたたいは薪を採り。老いたる母をばこくみ。虞舜は頑固
 なる父を敬ふとも云へり。シテ、縦令老期の愚なりとも。地、孝恩の心なからんやと。恨の
 涙連連たり。然るに教主釋尊も。羅睺爲長子と説き給へり。況んや三佛の中間の衆生とし
 て。恩愛のあはれを知らざらんは木石に異ならず。石の火の光の間をだにも。などや添ひもせぬ。
 親は千里を行けども子を忘れぬぞ眞なる。子はありて千年を経れども親を思はぬ習とは。今身
 の上に知られたり。シテ、げにや人の親の。地、心は闇にあられども。子を思ふ道に迷ふとは。眞

なりやわれながら。其面影の忘れぬ。昔に返す舞の袖。わが子はかうこそ舞ひしものな。此手
なば。かうこそ指ししぞとて。左右に颯颯の袖を垂れ。一つは又醉狂も難ると人や御覽すらん
酔泣も子を思ふ涙とや人の見るべき。

地「子を思ふ子を思ふ。(舞) 子を思ふ。身は老鶴の鳴くものな。地「げにや子を思ふ聞の。夜鶴の
聲は盃中。シテ廻るも盃。地「五老の月の影に酔ひ臥す枕の上に。シテ来らばわが子よ。

地「親物に狂は。子は難すべきものを。シテ「あら怨めしや唯。地「怨めしや唯。舞も歌も現な
さも。子故なれば。老の波のあはれ立ち歸り。今一目父に見えよかし。

地「此上は。何か包まんこれこそは。別れし御子松若と。云ふにも進む涙かな。もど誰そや我
が子と夕月夜、おぼつかなしやいづれきて。別れしわが子なるらん。地「變る姿の衰は。げに

それならぬ有様な。シテ「よくよく見ればさすが實に。地「親なりけり。シテ「子なりけるぞや。
地「怨めしやなどされば。とくにも名のり給はぬぞと。逢ふ時だにも怨ある。こは夢か夢にても。

逢ふこそ嬉しかりけれ。かくて親子にあひ竹の。かくて親子にあひ竹の。世を古里を改めて。佛

法流布の寺となし。佛種の縁となりけり。跡に伏屋の物語。浮世語になりけり。浮世語
になりけり。

百九 葵 上

ワキテ 六條御息所生靈(前は上臈、後は鬼女)

ワキツレ 大巫女

ワキツレ(大巫女)「これは朱雀院に仕へ奉る臣下なり。さても左大臣の御息女。葵の上の御物の
氣。以ての外に御座候ほどに。貴僧高僧を請じ申され。大法秘法醫療様様の御事にて候へども
さらに其驗なし。こゝに照日の神子とて隠れなき梓の上手の候を召して。生靈死靈のあひ
だを。梓にかけさせ申せとの御事にて候ほどに。此よし申しつけばやと存じ候。いかに誰かある。
照日の神子を召して来り候へ(今は上の二句を語はすして「やが)。ツレ(巫女)「天清淨地清淨。内外清
淨。六根清淨。寄り人は今ぞよりくる長濱の。蘆毛の駒に手綱ゆりかけ。
ツレ(上臈)「三つの車に法の道。火宅の門をや出でぬらん。夕顔の宿の破れ車。やる方なきこ
そ悲しけれ。浮世は牛の小車の。浮世は牛の小車の。廻るや報いなるらん。凡そ輪廻は車の輪

の如く。六趣四生を出でやらず。人間の不定芭蕉泡沫の世の習。きのふの花は今日の夢と。
 驚かぬこそ愚なれ。身のうきに人の恨の猶添ひて。忘れもやらぬわが思。せめてや暫し慰
 むと。梓の弓に怨靈の。これまで現れ出でたるなり。あら愧かしや今とても。忍び車のわ
 が姿。月をば詠めあかすとも。月をば詠め明すとも。月には見えじかげるふの。梓の弓のうら
 はすに。立ちよりうきを語らん。立ちよりうきを語らん。

シテ、梓の弓の音はいづくぞ。梓の弓の音はいづくぞ。ツレ、東屋の母屋の妻戸にぬたれども。
 シテ、姿なければとふ人もなし。ツレ、不思議やな誰とも見えぬ上臈の。破れ車に召されたるに。青
 女房と覺しき人の。牛もなき車の轅にとりつきさめさめと泣き給ふ痛はしさよ。問、若しかや
 うの人にてもや候らん。大臣、大方は推量申して候。唯つゝます名を御名のり候へ。

シテ、嗚、それ娑婆電光の境には。恨むべき人もなく。悲むべき身もあらざるに。いつさてうかれ
 そめつらん。唯、今梓の弓の音に。ひかれて現れ出でたるをば。いかなる者とか思しめす。こ
 れは六條の御息所の怨靈なり。われ世にありし古は。雲上の花の宴。春の朝の御遊にな

れ。仙洞の紅葉の秋の夜は。月に戯れ色香に染み。花やかなりし身なれども。衰へぬれば。權
 の。日影まつ間の有様なり。たいつとなきわが心。物憂き野邊の早蕨の。萌え出で初めし思
 の露。かゝる恨を暗さんとて。これまで現れ出でたるなり。嗚、思ひ知らすや世の中の。情は
 人のためならず。われ人のためつらければ。われ人のためつらければ。必ず身にも報うなり。何
 を歎くぞ葛の葉の。恨はさらにつきますまじ。恨はさらにつきますまじ。

シテ、嗚、あら恨めしや。問、今は打たでは適ひ候まじ。ツレ、嗚、あら淺ましや六條の。御息所程の御
 身にて。うはなり打の御ふるまひ。いかでさる事の候へき。唯おぼしめし止り給へ。シテ、問、いや
 いか云ふとも。今は打たでは適ふまじと。枕に立ち寄りちやうと打てば。ツレ、問、この上はと
 て立ち寄りて。わらはは後にて苦を見する。シテ、今の恨はありし報。ツレ、瞋恚の焰は。シテ、身
 を焦す。ツレ、思ひ知らすや。シテ、思ひ知れ。嗚、恨めしの心や。あら恨めしの心や。人の恨
 の深くして。憂き音に泣かせ給ふとも。生きて此世にましますまは。水暗き澤邊の。螢の影よりも。
 光る君とぞ契らん。シテ、わらはは蓬生の。嗚、もとあらざりし身となりて。葉末の露と消えもせば。

それさへことに恨めしや。夢にだにかへらぬものを我が契。昔語になりぬれば。猶も思はず鏡。その面影も愧かしや。枕に立てる破車。うち乗せ隠れ行かうよ。うち乗せ隠れ行かうよ。(中入)

大臣「圓いかに誰がある。葵の上の御物の氣。いよいよ以ての外に御座候ほどに。横川の小聖を請じて來り候へ。(狂言シカク)

五半(山伏)「九識の窓の前。十乘の床のほとりに。瑜伽の法水をたへへ。三密の月を澄ますところに。案内申さんとはいかなる者ぞ。(狂言シカク) ワキ「此間は別行の仔細あつて。何方へも罷り出でず候へども。大臣よりの御使と候ほどに。やがて参らうするにて候。

大臣「唯今の御出御大儀にて候。ワキ「承り候。さて病人はいづくに御座候ぞ。大臣「あれなる大床に御座候。ワキ「さらばやがて加持し申さうするにて候。大臣「尤にて候。

ワキ「行者は加持に参らんと。役の行者の跡をつぎ。胎金兩部の峰を分け。七寶の露を拂ひし條懸に。圓不淨を隔つる忍辱の袈裟。赤木の珠數のいらたかな。さらりさらりと押し揉んで。

で。一祈こそ祈つたれ。護三曼陀囉曰羅教。シテ「いかに行者。はや歸り給へ。歸らで不覺し給ふなよ。ワキ「たとひいかなる惡靈なりとも。行者の法力盡くべきかと。重れて珠數を押し揉んで。東方に降三世明王。シテ「南方軍荼梨夜叉。西方大威德明王。シテ「北方金剛。地「夜叉明王。シテ「中央大聖。不動明王。護三曼陀囉曰羅教。施陀摩訶遮那。娑婆多耶吒多羅吒干哈。聽我說者得大智慧。知我心者即身成佛。シテ「あらあら恐ろしの般若聲や。これまでぞ怨靈。この後又も來るまじ。地「讀誦の聲を聞く時は。讀誦の聲を聞く時は。惡鬼心を和らげ。忍辱慈悲の姿にて。菩薩もこゝに來迎す。成佛得脱の身となり行くぞありがたき。身となり行くぞありがたき。

百十輪藏

ワキ「解大王

ツレ火天

ワキ(太宰府僧)「東に残る法の道。東に残る法の道。迷はぬ教だのまん。圓これは筑前の宰府に居住の僧にて候。われ若年の昔より。佛法修行の志淺からず候へども。未だ都を見ず

候ほどに。洛陽の寺社に参り。殊には北野の天満天神は。當社御一體の御事なれば。参詣申さんと唯今思ひ立ちて候。進行、蒸氣紫船。法のためにと思ひ立つ。法のためにと思ひ立つ。雲路につく天の原。出づる日影の程もなく。難波の浦に著きしかば。これよりやがて旅衣。日も重なれば程もなく。都に早く著きにけり。都にはやく著きにけり。同急ぎ候ほどに。都に著きて候。これより北野に参らばやと思ひ候。

ワキ、誦 ありがたや釋迦一代の藏經を。大唐よりも渡しつゝ。末世の衆生濟度のために。輪藏に納め。結縁の手に觸れ縁を結ばせんと。御神の誓そありがたき。南無や傳大士普建普成。現受無比樂後生清淨土。

フレ(火天)「御」のふのうあれなる御僧。御身は筑前の宰府より來り給ひて候か。ワキ「不思議やな都始めて一見の者を。宰府の者とは何とで見知り給ふらん。ツレ」あら愚の仰やな。其方は知るしめされずとも。われは朝夕白雲の。迷はぬ法の友人なれば。などかは知らず候べき。ワキ「これに不思議の御事かな。さてさてかやうに承る御身はいかなる人やらん。ツレ」今は何をかつむ

べき。五千餘卷の御經を。晝夜に守護し奉る十二天のその中に。火天これまで來りたり。

ワキ、誦「そも火天とはまのあたり。天部を拜み申す事」と。感涙肝に銘じつゝ。現ともさらに辨へず。ツレ「なたも御身の貴さに。ワキ「隨喜湯仰。ツレ」さまたまに。地「説き置きし。御法の花も色色に。御法の花も色色に。教は多き道ながら。悟は一つぞ胸の月。曇らじや。三界唯一心の外ならじ。所は北の宮居。北辰は動かす。天満つ星のめぐるなる。輪藏を開きて。靜に拜み給へや。ワキ、誦「あらありがたの御事や。五千餘卷の御經を。一夜に拜ませおほしませ。ツレ」五千餘卷の御經を。一夜に御僧の拜まんとは。おほけなき御事なれどもさりながら。

其御身父母の胎内を出でしより以來。五戒を亂さず慈悲を起し。佛道修行し給ふこと。地「其功既に年久し。ツレ」然るに此御經に於いて。大唐よりも渡されし。地「傳大士普建普成とて。其身は俗體なりといへども。此三人のいかなれば。彼の御經に値遇の縁。深き心の隙もなく。晝夜に經を守護し給ふ。其後日の本に渡りし法の舟の内。浪路遙に漕がれ來し。心筑紫の果より。佛法東漸の。都の北の宮寺に。ツレ」納め給ひし昔より。地「今末の世と云ひながら

佛に拜み給へや。ワキ、誦「あらありがたの御事や。五千餘卷の御經を。一夜に拜ませおほしませ。ツレ」五千餘卷の御經を。一夜に御僧の拜まんとは。おほけなき御事なれどもさりながら。其御身父母の胎内を出でしより以來。五戒を亂さず慈悲を起し。佛道修行し給ふこと。地「其功既に年久し。ツレ」然るに此御經に於いて。大唐よりも渡されし。地「傳大士普建普成とて。其身は俗體なりといへども。此三人のいかなれば。彼の御經に値遇の縁。深き心の隙もなく。晝夜に經を守護し給ふ。其後日の本に渡りし法の舟の内。浪路遙に漕がれ來し。心筑紫の果より。佛法東漸の。都の北の宮寺に。ツレ」納め給ひし昔より。地「今末の世と云ひながら

たぐひ稀なる上人の結縁の利益仰ぎつゝ。衆生を濟度し給へ。われも姿を改めて。必ずここに來りつゝ。行道の利益なさんと。云ふかと思えて失せにけり。云ふかと思えて失せにけり。(中入)

ワキ、應「月は隈なき後夜の鐘。聲澄み渡るをりふしに。地ふしぎや異香薫じつゝ。音楽聞え紫雲たなびく絶間より。花降り下るぞあらたなる。云ひもあへれば妙經の。云ひもあへれば妙經の。守護神の御厨子の扉は忽四方へ開けて。傳大士二童子現れたり。

シテ(傳大王)「釋迦一代の御法の御箱。釋迦一代の御法の御箱を。彼の上人に悉く與へんと。普建普成の。二童子に持たせ。上人の御前にさし置き給へば。シテ傳大士座を立つて。傳大士座を立つて。竹杖にすがり膝を屈めて上人を禮し。かの御經を讀誦し給へば。善哉なれや。善哉なれと。夜遊を奏して舞ひ給ふ。(衆)「地いづれも妙なる舞の袖。いづれも妙なる舞の袖。月も照りそふ雲間より。天部の姿は隠れもなく。天降るこそありがたけれ。ツレ、應「そもそもこれは。釋迦一代の藏經の守護神。十二天のその内に。火天の姿を現すなり。

地「火天忽天降り。火天忽天降り。程なく目前に現れいでて。上人に向ひ。則ち結縁の行道の利益めぐらし給へと。おのおの立ちより上人を誘ひ。輪藏に御手をかけまくも。かたじけなしと互に押し廻り。廻りめぐるや日月の光。曇らぬ御法のあらたさよ。ツレ「これはこれ妙經の守護神なれば。地「妙經の守護神なれば。夜の間に傳教の儀式をあらはし。上人悉く披見の其後。おのおの御箱をとりどりに。遙の神前に運び給ふ。傳大士伴ひ。神前につき置き。いよいよ常社當寺の佛法。繁昌の靈地を崇め給へと上人に教へ。天部は雲居に上らせ給へば。七寶莊嚴の瑠璃の座の上に。傳大士二人の童子を伴ひ。傳大士二人の童子を伴ひ。歸り給ふぞありがたき。

新 謠 曲 全 集 中 卷 終

明治四十四年十二月廿九日印刷
明治四十五年一月二日發行

學生文庫第拾九編

不 許
複 製

謠 曲 全 集 中
定 價 金 三 十 錢

校訂者 大町桂月

發行者 加島虎吉

印刷者 平井登

發 兌

東京市日本橋區
本石町三丁目
東京市日本橋區
住吉町二番地

電話本局三六六番二一六七番
電話本局三六六番一七四四番
電話本局三六六番一八四九番
電話本局三六六番一九八四二番

至誠堂書店
至誠堂小賣部

大町桂月先生校訂解題

(逐次發刊)

學 生 文 庫

(全五十卷)

袖珍特製 定價各冊金拾三錢 頗美本

卓拔題

選譯至善

—— 既刊書目 ——

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
源平盛衰記三編	常山紀談下編	四書全	禪學名著集全	續心學道話全	日本外史下編	大岡政談上編	太閤記壹編	狂言記全	百人一首一夕話全
源平盛衰記四編	大岡政談下編	太閤記貳編	謠曲全集下編	川柳名句集全	平家物語上編	保元平治物語全	太平記二編	武士道名著集全	近刊書目

何人も一本を藏すべき
先哲名著の一大寶庫

周到卓拔なる批評的解題は
各書の性質綱要價値を詳説す

携帶至便

五部以上取上に特
一割に引候仕可
注文の文節は

價格至廉

新譯漢文叢書第一編 大町桂月先生譯評

○新譯 日本外史

(二十二版)

袖珍天金箱入特製 紙數 壹千貳百頁 特價金壹圓貳拾錢 小包料金八錢

本書は近世の偉人絶代の文豪頼山陽が一生の心血の凝る所識見卓拔筆力雄麗古英雄一々紙表に生動し干戈の聲恍として机上に起る成敗の跡火を見るが如く大義爲めに明らかにか天下の士氣爲めに振ふ實に東西無類の散文敘事詩なり現代の文豪大町桂月先生拮据三年之を今の文に移し文部省所定の假名遣に依り小學兒童にも容易に讀むを得せしむ嗚呼外史は斯くて永遠に復活すべし文部省所字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇拔痛快の批評を加ふることに復すべし難解のりて言ひ得ざりしことまでも遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を極む觀殊に奇一讀人を此血躍り腕鳴らしむ以て歴史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閉却して自ら寶を捨つる勿れ

新譯漢文叢書第二編 友田宜剛先生評解

(五版)

袖珍天金箱入特製 紙數 壹千壹百頁 正價金壹圓拾錢 小包料金八錢

○新譯 文章軌範

◎東京朝日新聞評、文章軌範を普通の日本文に譯し(本文悉くゴツツク五號活字を用ふ)更に平易の口語文に通解し別に又語釋を施し文の構造法を説明し上欄に原漢文を掲げたり文章軌範評解の書として最も初學者の通じ易きものにして從來漢文の研究書たりし文章軌範は明治の日本文を習ふもの、研究書となれり著者は文章教授上に一見地を具せる人斯人にして此書あるは世人の期待に負かずと云ふ可し

新譯漢文叢書第三編 濱野知三郎先生註解

(三版)

袖珍天金箱入特製 正價金九拾錢 紙數 八百頁 郵税金八錢

○新譯 孟子

(附索引)

◎讀賣新聞評、孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄には五十音に基く索引を添へ書中の一語を知るときは直に其全文を求め得るの便に供したり……其和譯の正當なる註譯の穩健にして平易なる世に貢獻する所少なからざるべく殊に孟子の書は其議論の奇拔なる其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一位に置くべきもの青年子弟の讀物として最も現代に適切のもの……此國民修養の一大格言集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりも愉快とせざるを得ず

新譯漢文叢書第四編 大町桂月先生譯評

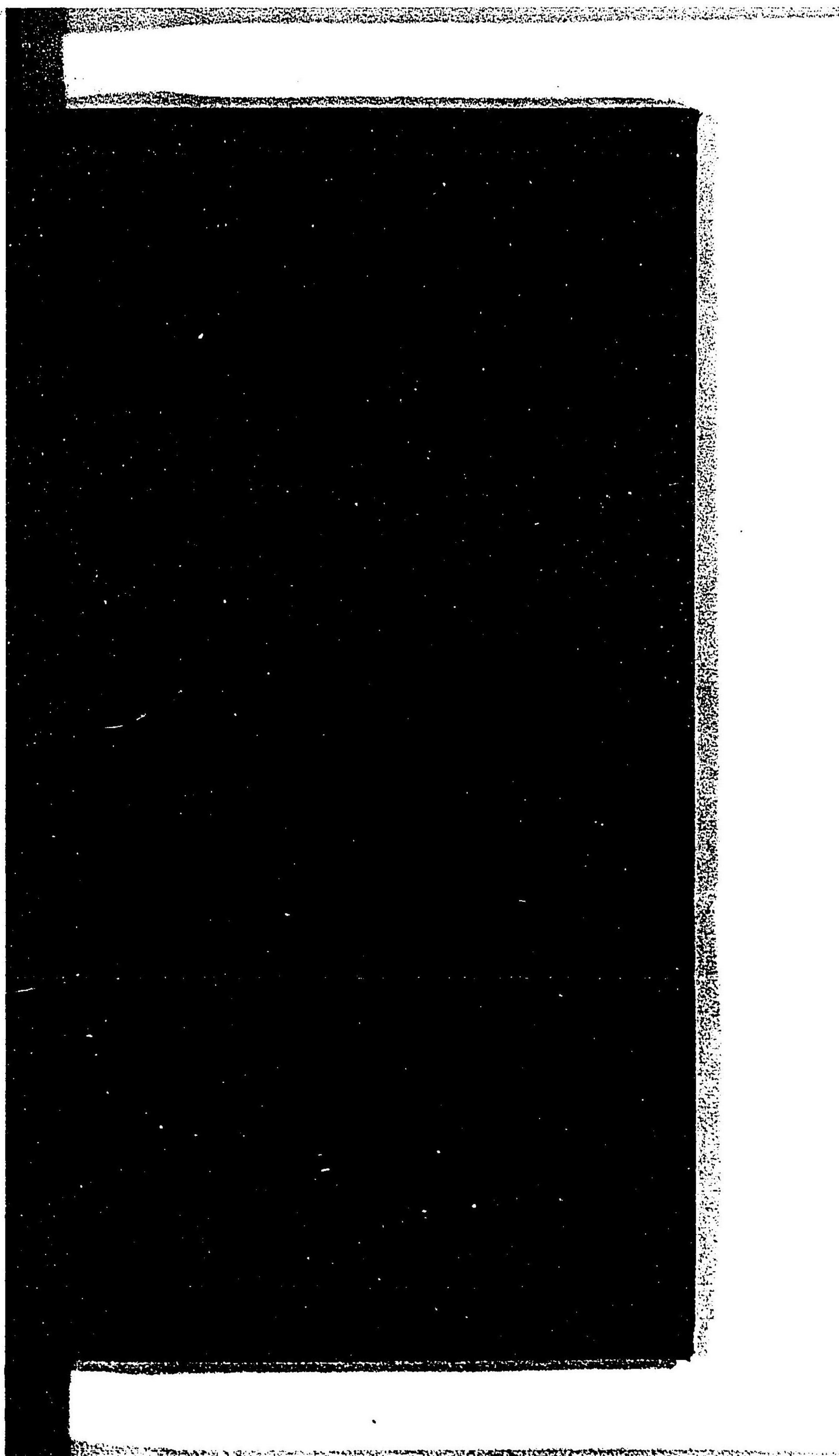
(再版)

袖珍天金箱入特製 正價金五拾錢 紙數 三百三十頁 郵税金六錢

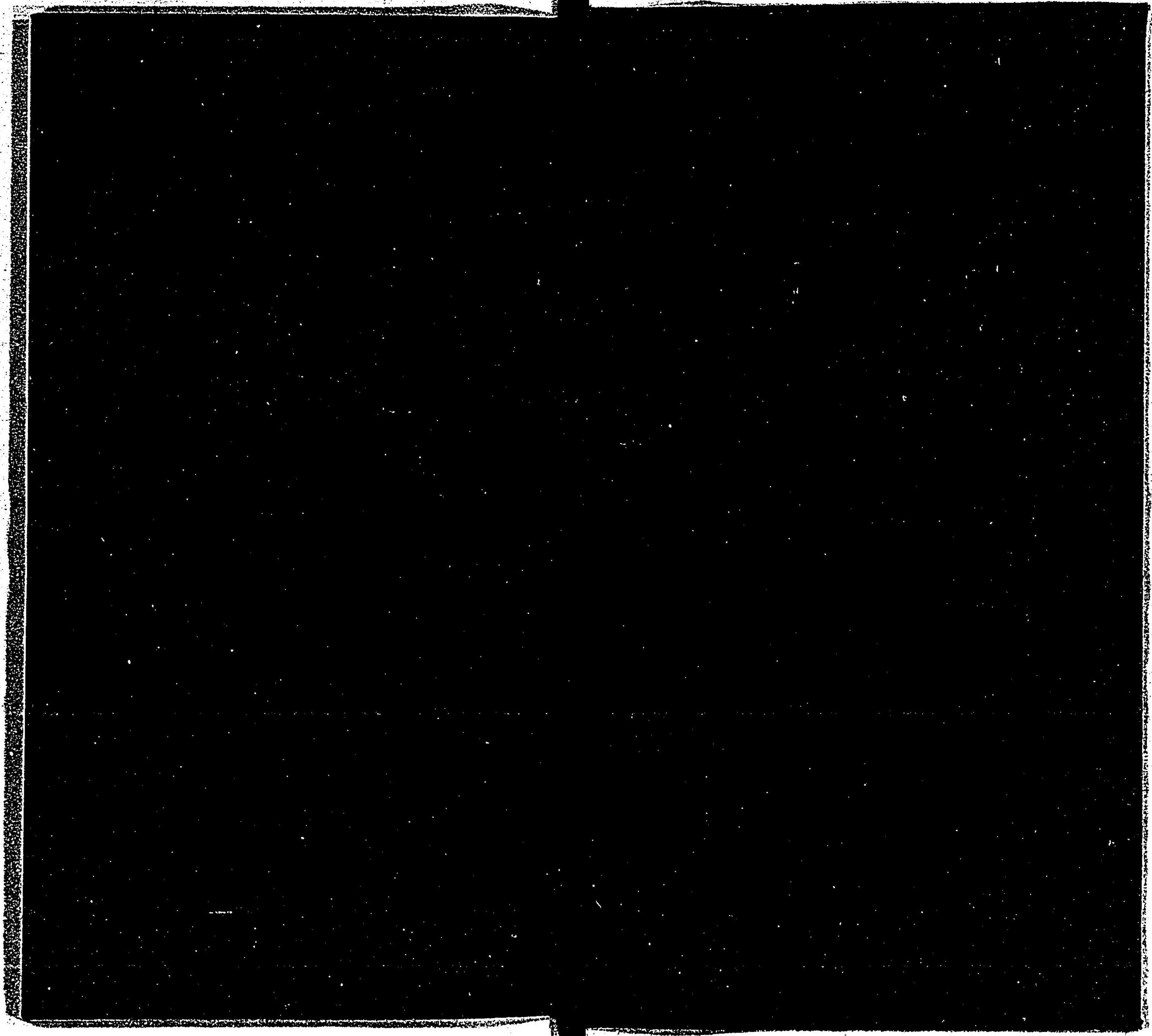
○新譯 日本樂府

當代に異彩を放てる大町桂月先生嚆ぎに日本外史を譯せられ今又頼山陽の咏史日本樂府を譯するのみならず之を譯し之を評せらる徹底の見老熟の筆明快を極めて渾然として桂月一流の名文となり朗朗誦すべく尊王の詩人又愛國の詩人として古今に獨歩せる頼翁の氣魄と筆致とを躍動せしむ以て日本歴史を知るべく以て士氣を鼓舞すべし日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起らん

266
750



266
750



特 63

605

學 生 文 庫

第九編

新 訂 謠 曲

全 集 中

大町桂月校訂

東京至誠堂發兌

1112